福岡市埋蔵文化財調査報告書第272集

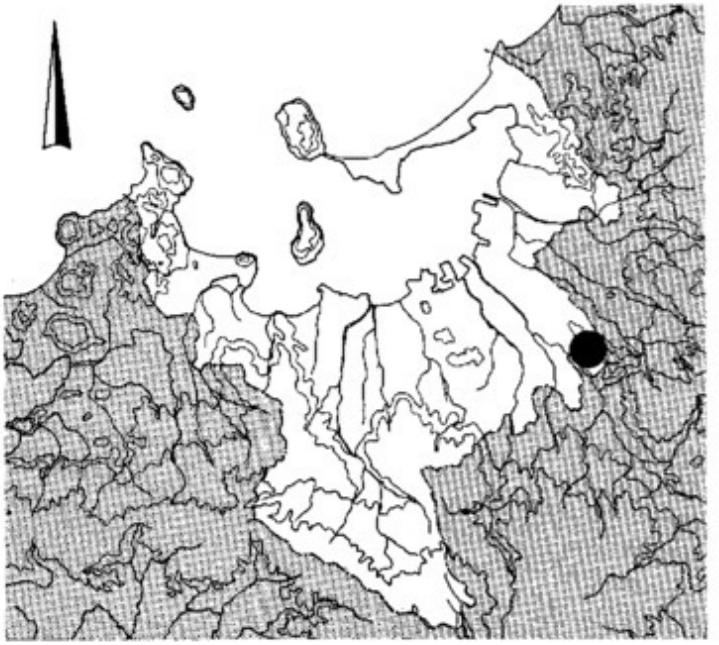
立花寺 1

1992

福岡市教育委員会

立花寺（りゅうげじ） 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第272集



1992

福岡市教育委員会

序

福岡市の東を限る月隈丘陵では，これまでに史跡金隈遺跡をはじめ，弥生時代を中心とした時代の重要な遺跡が発見され，調査されてきました。

この度報告書を刊行する立花寺遺跡群の調査は，この月隈丘陵にあって，これまで調査された例とは異なった立地，時代の資料を調査したものとして重要な遺跡となりました。調査は，遺跡のごく一部についてのものでありましたが，一帯に広がる遺跡の内容の一端を垣間見ることができるものでした。

本書を刊行するに当たり，調査に際してご協力頂いた地元を始めとする多くの方々に心からお礼申し上げるとともに，本書が埋蔵文化財に対する理解と活用のための一助となれば幸いです。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会
教育長　井　口　雄　哉

はじめに

1．本書は，昭和63（1988）年度，福岡市教育委員会がおこなった，立花寺（りゅうげじ）遺跡群第1次発掘調査の調査報告書である。

2．発掘調査にあたっては，条件整備等に際して，工事担当の博多区土木農林課，道路隣接地の方々に種々ご配慮頂いた。この場で深く感謝申し上げます。また，降雨等の悪条件のなかでの作業に従事して頂いた作業員の方々にも重ねて感謝申し上げます。

3．発掘調査・整理報告は，教育委員会文化部埋蔵文化財課埋蔵文化財第一係　佐藤一郎・杉山富雄が担当した。

4．本書の作成にあたって，遺物写真の撮影ほかについて，埋蔵文化財センター二宮忠司氏の手をわずらわせた。

5．今回報告した資料については，すべて福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理する予定である。

調査の要旨は以下の通りである。

遺跡調査番号	8807		遺跡略号	RGG. 1	
調査地	博多区大字立花寺字松尾谷96－1外				
用途面積	1,303㎡	調査対象面積	540㎡	調査面積	254㎡
調査期間	1988年4月30日～6月15日		事前審査番号	62－326	

凡例

1．本書で使用した方位は真北である。

目　次

Ⅰ．立花寺遺跡とその調査 …… 1

Ⅰ－1　立花寺遺跡の概要

Ⅰ－1－a　立花寺遺跡の位置

Ⅰ－1－b　立花寺遺跡の現状と既存の調査

Ⅱ．立花寺遺跡群第1次調査の成果 …… 3

Ⅱ－1　発掘調査の経過

Ⅱ－1－a　発掘調査に至るまで

Ⅱ－1－b　発掘調査の経過

Ⅱ－2　Ⅰ区の調査と成果 …… 5

Ⅱ－2－a　Ⅰ区の調査

Ⅱ－2－b　Ⅰ区出土の遺構と遺物

流路（遺構2）（図4・5・6・7・8） …… 6

流路（遺構2）出土遺物 …… 10

3a層出土遺物（図9・10） …… 10

3b層出土遺物（図11） …… 12

3c層出土遺物（図12） …… 13

3d層出土遺物（図13・14） …… 15

土壙　1（図15・16） …… 18

溝　3 …… 18

Ⅱ－3　Ⅱ区の調査と成果 …… 21

Ⅱ－3－a　Ⅱ区の調査

Ⅱ－3－b　Ⅱ区出土の遺構と遺物

溝　4（図23～26） …… 21

溝4出土遺物（図27～30） …… 25

溝　5（図23・24） …… 30

溝　6（図31） …… 34

溝　7（図32～34） …… 34

溝7出土遺物（図36・37・47） …… 35

溝　8（図35） …… 38

溝　9（図38） …… 38

溝９出土遺物（図39） …… 38
土壙12（図40・43・44） …… 41
土壙12出土遺物（図41） …… 41
溝　16（図45） …… 41
溝16出土遺物（図42） …… 44
おわりに …… 50

図目次

図1　立花寺遺跡群の位置（1：50,000）…… 1
図2　立花寺第1次調査地点遠景（北から）…… 3
図3　立花寺第1次調査地点の位置（1：2,000）…… 4
図4　I区全景（南から）…… 6
図5　I区全体遺構図（1：100）…… 7
図6　I区西壁土層（北東から）…… 8
図7　I区東壁土層（北西から）…… 8
図8　I区西壁土層断面図（1：80）…… 9
図9　流路（遺構2）3a層出土遺物実測図 1（1：3）…… 11
図10　流路（遺構2）3a層出土遺物実測図 2（1：3）…… 12
図11　流路（遺構2）3b層出土遺物実測図（1：3）…… 13
図12　流路（遺構2）3c層出土遺物実測図（1：3）…… 14
図13　流路（遺構2）3d層出土遺物実測図 1（1：3）…… 16
図14　流路（遺構2）3d層出土遺物実測図 2（1：3，1：4）…… 17
図15　土壙1　土層（西から）…… 19
図16　土壙1（南から）…… 19
図17　流路（遺構2）溝底木器出土状況（北から）…… 20
図18　流路（遺構2）出土遺物…… 20
図19　II区全景（北から）…… 21
図20　II区全景（南から）…… 22
図21　II区深掘り（南から）…… 22
図22　II区全体遺構図（1：100）…… 23
図23　溝4・5（北から）…… 24
図24　溝4・5（西から）…… 24
図25　溝4実測図（1：40）…… 25
図26　溝4土層（東から）…… 26
図27　溝4出土遺物実測図 1（1：3）…… 27
図28　溝4出土遺物実測図 2（1：3）…… 29
図29　溝4出土遺物実測図 3（1：3）…… 30
図30　溝4出土遺物…… 31

図31　溝6（南西から）…… 32
図32　溝7（南から）…… 32
図33　溝7（北から）…… 33
図34　溝7段落ち部（南西から）…… 33
図35　溝8（北西から）…… 34
図36　溝7出土遺物実測図1（1：3）…… 35
図37　溝7出土遺物実測図2（1：3）…… 36
図38　溝9（南から）…… 37
図39　溝9出土遺物実測図（1：3）…… 39
図40　土壙12実測図（1：30）…… 40
図41　土壙12出土遺物実測図（1：3）…… 40
図42　溝16出土遺物実測図（1：3）…… 41
図43　土壙12（北から）…… 42
図44　土壙12遺物出土状況（北から）…… 42
図45　溝16（南から）…… 43
図46　溝9・16（北から）…… 43
図47　溝7・9出土遺物…… 44

表目次

表1　遺物一覧表1…… 45
表2　遺物一覧表2…… 46
表3　遺物一覧表3…… 47
表4　遺物一覧表4…… 48
表5　遺物一覧表5…… 49

Ⅰ．立花寺遺跡とその調査

Ⅰ－1　立花寺遺跡の概要

Ⅰ－1－a　　立花寺遺跡の位置

月隈丘陵は四王寺山からつづく標高100～200m 程の丘陵で，次第に高度を下げながら北西方向にのびている。その丘陵西斜面の裾部に，立花寺（りゅうげじ）遺跡群が位置する。丘陵斜面は開析作用が著しく，丘頂部が独立丘状に残されているか，ごく低い鞍部によってつながっている地形が顕著である。

付近のそのような地形には弥生時代の墓地が形成される例があり，過去に調査されたものとして，下月隈Ｂ（下月隈宮ノ後）遺跡(1)，天神森（下月隈天神森）遺跡(2)，上月隈遺跡(3)などを挙げることができる。また，立花寺遺跡群の南に接した丘陵頂部には金隈遺跡(4)が所在する。また，墓地に袋状竪穴群が組合わさって遺跡が形成された金隈上屋敷遺跡(5)は，金隈遺跡の東南隣の尾根に位置し，更に東南隣の尾根には，墓地を除いて袋状竪穴群のみで形成された影ヶ浦遺跡(6)が立地しており，あたかも，弥生時代墓地の領域と，袋状竪穴の構築される領域とが別なものとしてあるかのような分布の様態をしめしている。そして，いまのべた２者が共に同一地形上に立地する例は，調査されたものとしてはほかに，丘陵北方にやや離れて宝満尾遺跡(7)の例が知られている。さらに，丘陵頂部は古墳時代にいたると古墳の築造に利用されている。

いっぽう，斜面あるいは丘陵裾の低地部分の遺跡については，その調査が丘陵の北端近く，席田遺跡群(8)に偏っておこなわれており，弥生時代の中期から後期にかけての竪穴住居を確認している。

さて，立花寺遺跡群はその範囲を，上に述べたような独立丘とその周囲の緩斜面に推定されている。一帯は開析がすすみ独立丘が幾つか形成されている。それ

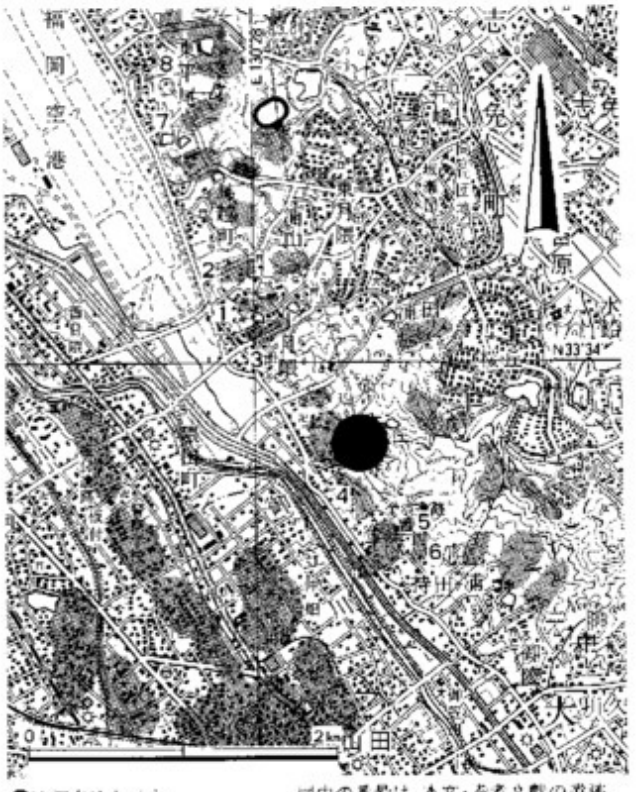


図１　立花寺遺跡群の位置（1:50,000）

らの間はごく低い鞍部を残すか，谷部により隔てられている。谷部は調査時の所見からするかぎり，砂礫により埋積されて扇状地状をなし，谷出口の沖積地に向かって緩い傾斜をもって続いている。この地形は，遺跡東側の谷では現在の河谷により深く切り込まれており，両者間の比高は3m程を測る。今回報告する調査の後おこなわれた第2次調査は，丘陵とこの崖面との間のごく狭い帯状の平坦面に立地する遺跡についての調査である。

I－1－b　立花寺遺跡の現状と既存の調査

立花寺遺跡群について，現在に至るまでに2次の発掘調査がおこなわれている。

第1次調査

市道新設に先立つ記録保存のための発掘調査である。今回報告する。立花寺遺跡についての最初の発掘調査である。調査開始時点で，調査予定地の北に接する孤立丘は削平，宅地の造成を終わっていた。この丘陵頂部には古墳1基が存在したことが，福岡市文化財分布地図に記されている。調査地点Ⅱ区の東に続く斜面は，その前面が深く切り込んだ谷に面して崖を形成していたと思われるが，早い時期の宅地造成によりその姿を変えている。同様Ⅱ区の南側も，宅地造成が，丘陵のかなり高い位置まで行われている。

第1次調査を終了後，市道が開通した後は，状況は更に変化した。北側丘陵の造成地は更に手が加えられ，全面が分譲地としての体裁を整え，住宅の建築がまたたく間に進行した。そのような変化のなかで，調査区の北東部隣接地に開発の計画がもちあがり，それに先立つ記録保存のための発掘調査として，第2次調査が行われることとなった。

第2次調査

民間の開発事業に先立って，記録保存のために実施した発掘調査である。1990年9月から同12月の調査期間で，1,002㎡を調査した。

調査の結果として，奈良時代から平安時代にかけて，先に述べたような丘陵の裾と崖との間の狭長な緩傾斜地を整地し，建物を建築した遺構が重層的に確認されたほかに，古墳時代後期の竪穴住居，弥生時代の遺物が確認された。現在整理作業中。

～参考文献～

上記遺跡については，下記の報告書が刊行されている。尚，文中の番号は，図1中の番号にそれぞれ一致する。

(1) 『下月隈B／後遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第61集（1980）
『下月隈B／後遺跡，『下月隈天神森遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第76集（1981）
(2) 『下月隈天神森遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第76集（1981）
(3) 『上月隈遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第257集（1991）
(4) 『金隈遺跡―第一次調査概報―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集（1970）
『金隈遺跡―第二次調査概報―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第17集（1971）
(5) 1986年調査，未報告。
(6) 『影ヶ浦古墳群1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第241集（1991）
『宝満尾遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集（1974）
『板付遺跡群調査概報1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第44集（1978）
『板付遺跡群調査概報Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第46集（1978）
『板付遺跡群久保園遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集（1983）
『中尾遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第109集（1984）
『板付遺跡群Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第218集（1990）

Ⅱ．立花寺遺跡群第１次調査の成果

Ⅱ－１　発掘調査の経過

Ⅱ－１－ａ　発掘調査に至るまで

昭和62（1987）年度に博多区土木農林課から，博多区大字立花寺字松尾地内における市道新設工事の計画が示された。これを受けて，教育委員会埋蔵文化財課で，福岡市文化財分布地図と照合の結果，立花寺遺跡群の範囲内に位置することがわかり，1987年10月７日工事予定地内の試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は，道路予定地の南端から北端に向かって，路線に沿った方向の試掘溝を断続して設定，調査した。試掘溝は幅１ｍ程で，機力によって掘り下げた。道路予定地の北端は耕作中で，除外した他の区域に６本の試掘溝を設定した。その結果，南北両端部に設定した試掘溝で遺構・遺物の検出があったほかは，現地表下0.2～1.0m で地山真砂層に至る間に，遺物・遺構の検出はできなかった。

試掘調査の結果，古墳時代以降の遺構ほかの存在が予想された道路予定地の南北端部について，発掘調査を必要とするという結論に至り，昭和63（1988）年度の埋蔵文化財課事業として実施することとなった。調査は，埋蔵文化財課埋蔵文化財第一係が担当した。

図２　立花寺第１次調査地点遠景（北から）

図3　立花寺第1次調査地点の位置（1:2,000）

Ⅱ－1－b　発掘調査の経過

1988年４月28日　発掘調査は，道路予定地北端部の確認調査を機力によっておこなうことから開始した（Ⅰ区）が，本格的に人力による掘り下げに着手したのは，５月６日からである。

５月16日　Ⅰ区の遺構を掘り上げ，続いて記録作業に入った。完了は５月24日である。この間，降雨日が多く，調査区壁の崩落，排水，清掃作業などで作業効率は極端に悪くなった。

５月21日　Ⅰ区に対して，道路予定地南端部に設定した調査区をⅡ区とした。Ⅰ区に平行して，遺構確認作業を開始した。

６月13日　Ⅱ区の深掘り部分を残して埋め戻しを開始した。

６月15日　全ての作業を終え，現場を撤収した。

調査の記録については，平面上の基準は，X軸がⅡ区の長軸線に沿う直交座標を設定した。それを福岡市道路管理地図上に図示した（図２）。

高さの基準は，立花寺集落脇，県道交差点の路盤高を既知点として，Ⅱ区東北隅境界杭上の高さ23.48m を得て，これを利用した。

調査の記録は，Ⅰ区の全体をを50分の１，Ⅱ区の全体を20分の１平面図により行ったほかに，個別遺構図，土層断面実測図を必要に応じて作成した。

調査時，遺構・遺物についてそれぞれの通し番号を設定した。遺物については，整理の過程で分離，統合などが必要となったがその過程を台帳に記録して，調査時の記録と照合できるかたちとした。報告中の遺物番号は，これを用いている。埋蔵文化財センターへの収蔵に際しても，これを遺物番号として登録する予定である。

Ⅱ－2　Ⅰ区の調査と成果

Ⅱ－2－a　Ⅰ区の調査

道路予定地の北端部の調査区である。発掘調査に当たって，試掘調査の時点では作付けのために試掘溝を入れられなかった最北端部分については，試掘溝を設定し，遺構・遺物の広がりを確認して，調査区の範囲を決定することにした。予定路線の方向に沿う方向で，機力による試掘を行った。結果として，道路予定地北端から20m は，現地表下にシルトあるいは砂礫の堆積が続き，人為物は検出できなかった。そこでこの部分を除外し，これと試掘調査時の結果とからⅠ区の範囲をを設定した。また，表土が厚かったこともあって安全のため法面を大きくとったことで，調査区下底面での調査面積45㎡の調査区となった。

発掘調査は，盛土及び旧耕作土を機力により除去し，遺物包含層とされた層の上面から人力による調査を開始した。包含層とされていた層は，その掘り下げの結果，ある時期の河川の流

路を埋める堆積であることがわかった。この掘り下げの過程で，遺構が検出され，結果として，Ⅰ区では河川のほかに２基の遺構を調査することとなった。

以下，Ⅰ区で出土した遺構と遺物について述べる。

Ⅱ－２－ｂ　Ⅰ区出土の遺構と遺物

流路（遺構２）（図４・５・６・７・８）

人為的な溝などの可能性については，判断の材料が少ない。現地形から考えると丘陵に寄った，比較的高い部分を流れ，不自然な位置関係にある。遺物がまとまって出土しているので報告する。整理の都合上，遺構２としておく。流路という言葉が妥当かどうかという問題もあろうが，ある時期，Ⅰ区の面する谷の流れの痕跡と考える。

調査区では，北東から南西の方向へ斜断する方向に走る。地形図と照合する限り，丘陵裾に沿って流れたものかと思われる。水流は，花崗岩の風化土を深く切り込んで流れており，その底面には何条かの流れの痕跡が残されているが，いずれも上述の方向に沿うものである。また，両岸にも水流による抉れが顕著である。流路を埋積する土砂の南岸寄りには，地山の崩落土を顕著に含み，あるいはそれのブロックも含まれることもある。さらに調査区西壁に接する位置では，他からの土砂を含まずそのまま再堆積し，地山と区別の難しい部分もみられた。南岸か

図４　Ⅰ区全景（南から）

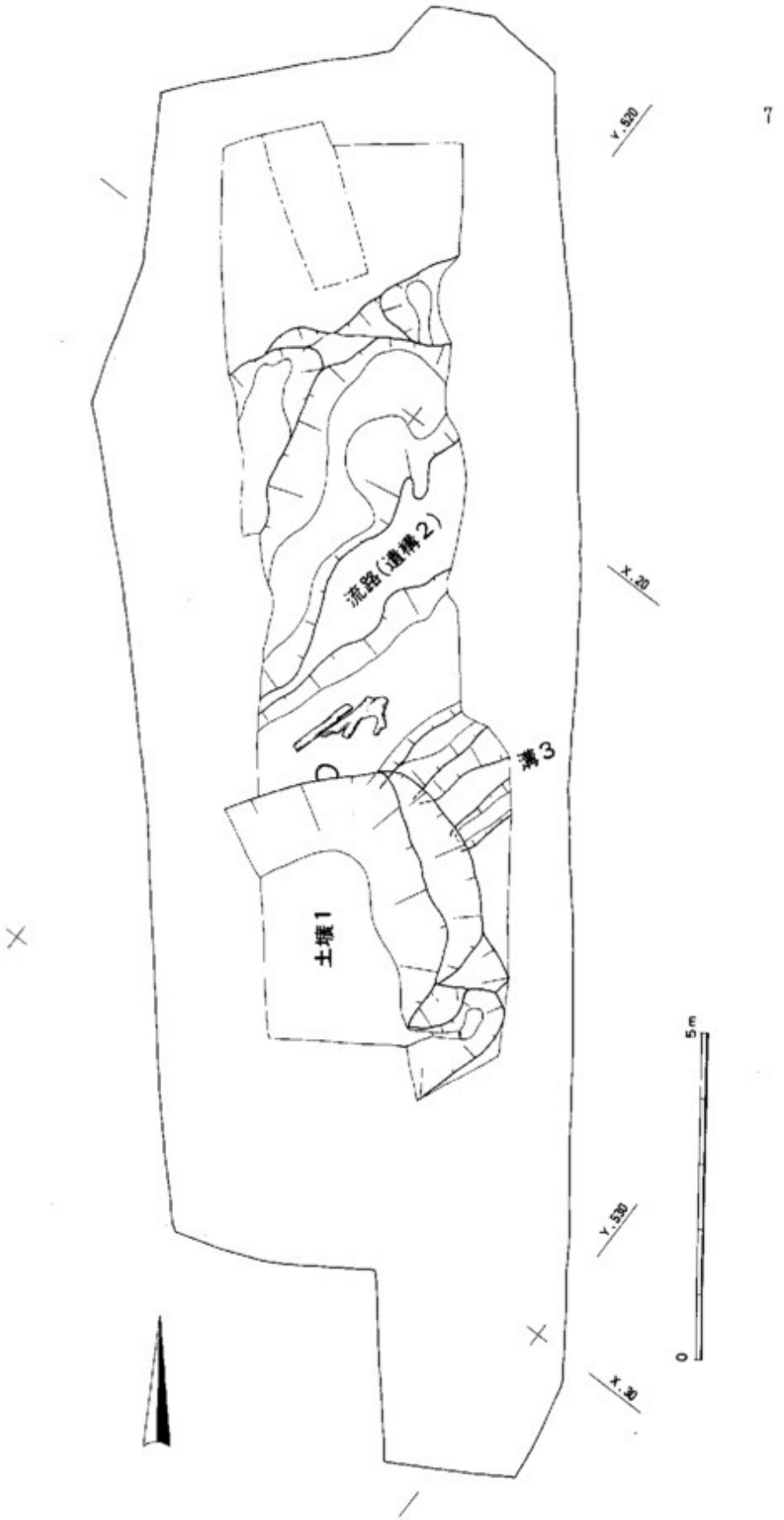


図5　I区全体遺構図（1:100）

図6　I区西壁土層（北東から）

図7　I区東壁土層（北西から）

ら一時期大量の土砂の供給されていた状況が知られる。南岸にはこれと関連して，上方から流れ下る水流による抉れが顕著である。この流路は，自然に埋没がはじまり，ほぼ完全に埋没したのちに農地として利用されている。

流路を埋める堆積を3層としたが，それは大きく4層に分けられ，いずれからも遺物が多数出土した。

最上位の層は3a層である。当初包含層として調査を始めたものである。厚さ0.3mを前後し，北は流路の最深部を越えて北へのびる。調査区は，北に接して灌漑用のパイプのあることで，これ以上の拡張が不可能で，その広がりについては確認できなかった。ただ，10m程離れて設定した試掘溝では，確認できていない。後の時期，新しい流路により削除された可能性がある。3a層は黒褐色，粗粒砂混じりの粘質土である。その上面はやや南に向かって傾斜し，下面は流路の最深部に沿って傾斜している。3a層を掘り上げると，南岸寄りに分布を狭めた土層が分布している。3b層とした。

3b層は，灰色の砂層である。黒褐色の粘質土のブロック部分を挟んでいる。流路の幅で広がっている。流路中央部で最も厚く，0.3m程を測る。部分的には，下位の堆積を深く切り込んで，流路の底に至っている。礫も含んでいる。

3c層は，3b層より北にやや広く分布する。流路最深部で最も厚いことは，3b層と同様である。この部分で，厚さ

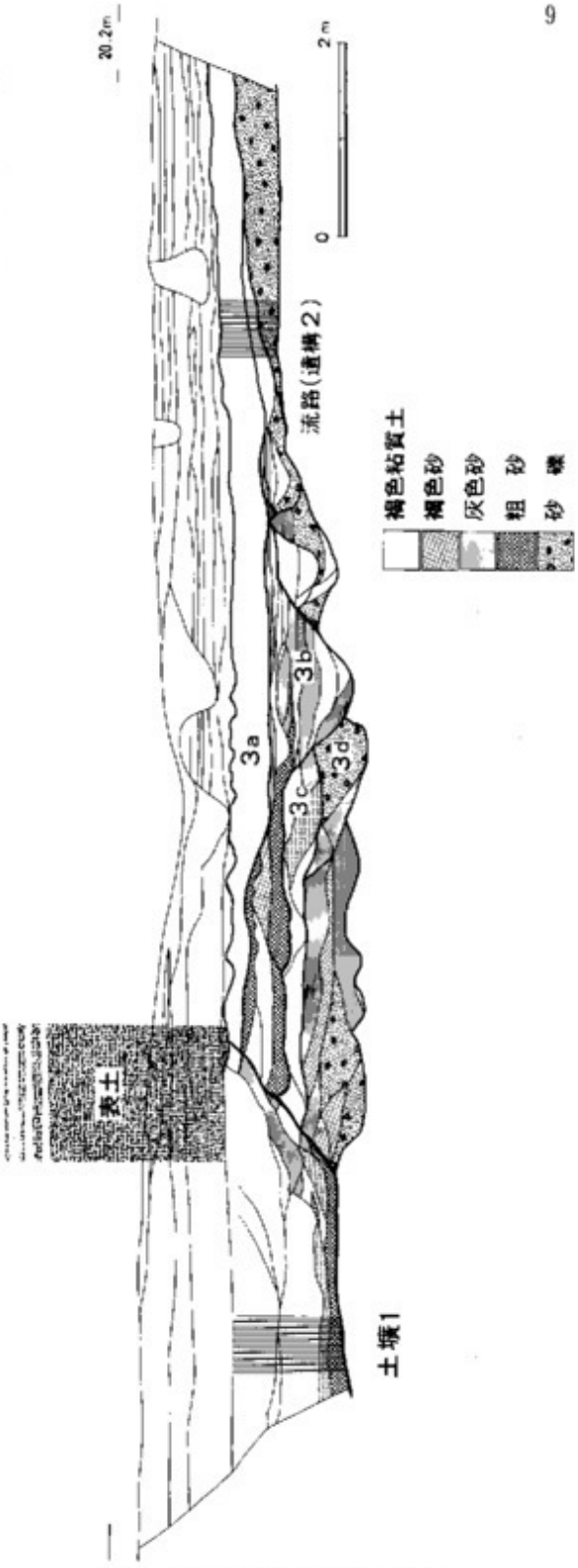


図8　I区西壁土層断面図（1:80）

0.3m を測る。黒褐色粘質土と灰色砂の薄層が互層を成している。

本報告で3d層とするのは，3c層以下，流路底に至る迄の部分すべてである。調査時，この部分をd～iまでに細分した部分もあるが，レンズ状の薄層で明確に区分して示せない。砂礫層で砂層の薄層を挟み，黒褐色土のブロックを含む。最深部では，礫が顕著に含まれている。

以上の埋積土を除去した流路の幅は，顕著な段をもつ部分のそれで7m程を測る。同様，深さは北側の方から最深部までで1m程ある。

流路（遺構2）出土遺物

流路から出土した遺物は，総量でコンテナ2.5箱程である。そのうち，須恵器が1.5箱程で大半を占める。なかでも，蓋坏類の資料が顕著である。他は弥生式土器，土師式土器がコンテ2/3程を占めている。以下，各層毎に図示可能な資料を掲げる。

3a層出土遺物（図9・10）

黒色土器（307・308・310・312）

いずれも破片の資料である。308が全体を復原できる資料であるほかは，それぞれ各部の図示が可能な小破片である。すべて，内面のみを燻す黒色土器である。いずれも器表の遺存状態が不良である。内面には篦磨き調整が行われているが，307で内底面を往復する方向の単位が観察されるほかは，その単位が不明瞭である。外面は，312に撫で調整が行われていることがわかる。308は，復原口縁部径14.6cm，器高6.2cmを測る。312は，復原口縁部径14.6cmを測る資料である。

瓦器311は，高台部のみの破片である。内底面に重ね焼きの痕跡が残る。高台内底面は，回転を利用した撫で調整がおこなわれている。内底面に篦磨き調整が行われているようだが不鮮明である。高台径6.4cmを測る。

須恵器には各時期の資料が含まれる。

高台坏266・289は小破片の資料である。289には内底面を往復する方向の撫で調整がおこなわれている。266は復原口縁部径15.5cmを測る。

坏蓋261・253・249は，1/3から1/4の破片資料である。順に復原口縁部径11.7cm，13.3cm，14.9cmをそれぞれ測る。いずれも上半部1/3以上の部分に回転篦削りをおこなっている。高坏295は，脚部の資料である。300は稜碗とする器形であろうか。高台部を欠く資料である。復原口縁部径15.6cmを測る。広口壺298は体部の小破片である。

焼成は須恵器と同様であるが，系統を異にすると思われる資料が出土している（282・283・286・280・279・285・278・267）。

「朝鮮製無釉陶器」といった呼称を与えられている資料に該当するものである。[注1] 他の遺跡での経験からもいえることであるが，形状を復原できない細片資料がおおく，想定される大きさからすると目立って器厚が小さい。内面に目の細かな同心円状の，外面に同様細かな格子目状の

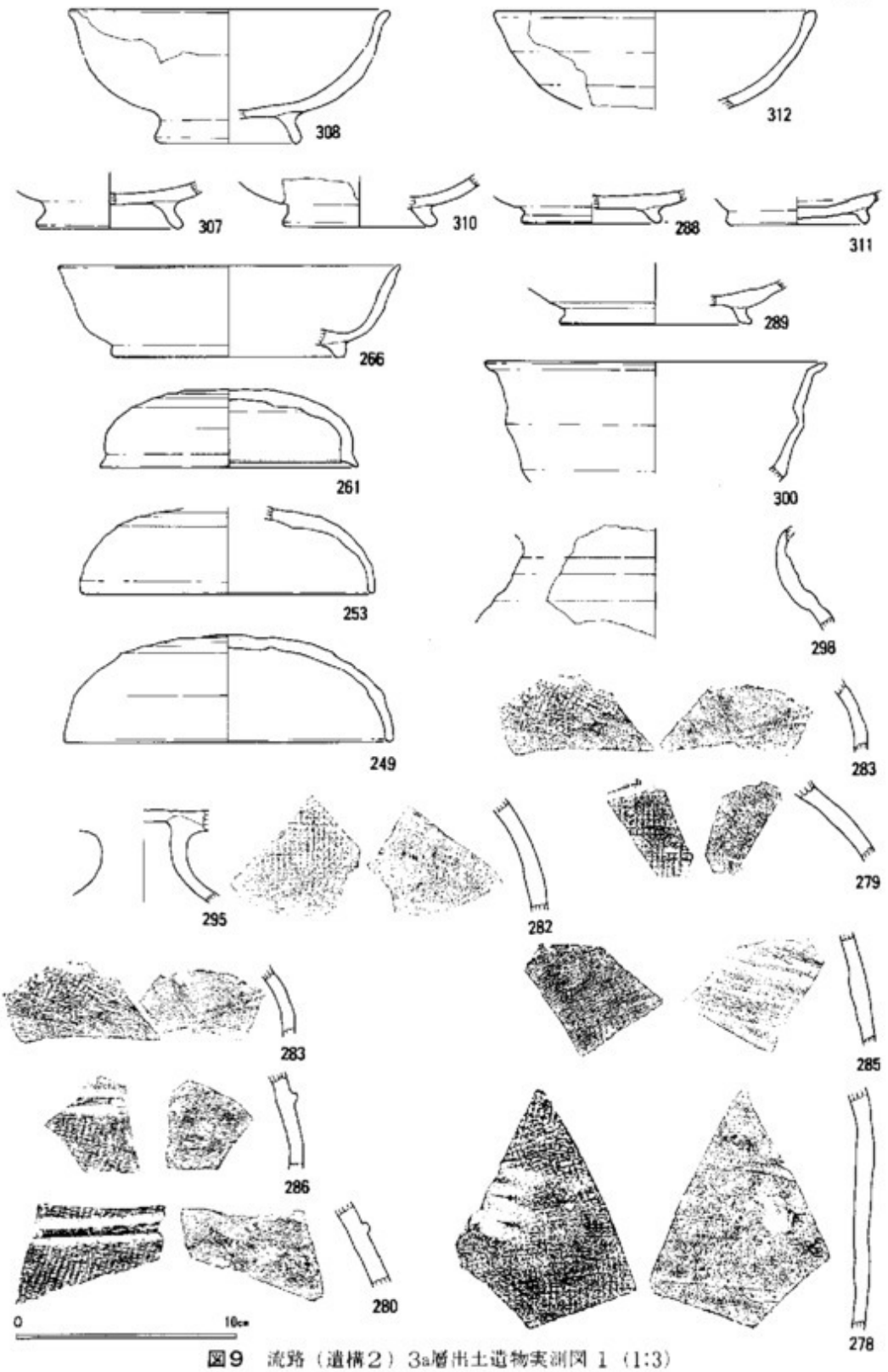


図9　流路（遺構2）3a層出土遺物実測図 1（1:3）

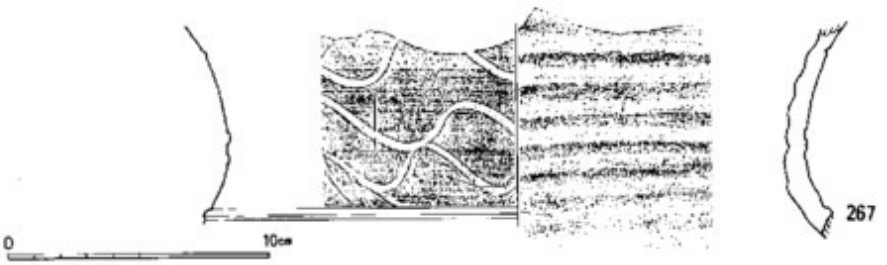


図10　流路（遺構）3a層出土遺物実測図 2（1:3）

叩き目を部分的に残し，多くの部分は強い撫で調整により平滑に整えられている。この部分での器表はごく緻密で，この点，須恵器のそれとの差異が際立つように思われる。

細いが顕著に突出した，断面半円形の突帯を張りつける例もある（286・280）。278は弧状の把手を貼り付けた部分に近いものか，一部が凹む。

胎土に粗粒，細粒の砂粒を多く含むほかに，灰色粗粒の粒子も観察される。また，細孔が顕著にみられる。

267もここで報告する資料に含まれるものであろうが，他と異なり，端部を欠く口縁部の資料である。内外面とも回転を利用した撫で調整をおこなう。特に内面のそれは強い力を加えられたものか，顕著な波状を呈す。外面には回転を利用し，不規則な波状文が3条施されている。断面が半円形の工具を使用している。頸部と体部の境界と考える位置には断面が半円形状の突帯1条が資料には残されている。頸部の径の最小部で22.6cmを測る。

3b層出土遺物（図11）

土師器高台碗309・306は，底部の小破片資料である。306の内面には口縁に沿う方向で短い単位で繰り返す撫で調整が観察される。287は体部の小破片で，回転を利用した撫で調整によるものか，外面が緩い波状を呈す。

須恵器坏250は，全体の1/2の資料である。底部から1/3の高さの位置まで回転を利用した篦削りがおこなわれている。内底面の凹部にそれを往復する方向の撫で調整がおこなわれる。

「朝鮮製無釉陶器」（284・281）は，いずれも大形の器形の体部小破片である。外面に叩き目を残す。281には2条の突帯が残されている。

細片であるが，瓦の資料も出土している。数はごく少数である。

248は軒丸瓦の瓦当面小破片である。中房を欠失する。外区に16の珠文，内区には珠文と中心とを結ぶ線を中軸線として蓮弁が配置されている。蓮弁の形状はいびつで，はっきりしないが単弁とみえる。須恵質で，極粗粒砂を顕著に含む。瓦当面外縁の復原径14.4cmを測る。269は，平瓦の細片である。上面に布目が，下面には粗い格子目の叩き目が残る。胎土に粗粒砂を顕著に含み，軟質である。

3c層出土遺物（図12）

弥生式土器は多くが細片となって出土した。図示出来る資料を示す。**275**は小形の壺上半部の小破片資料である。内外面とも器表の荒れが著しいが，頸部の内面に指押さえのおこなわれていることがわかる。甕**213**は口縁部の小破片資料である。口縁の屈曲部外面に指押さえの圧痕が残る。内面は，指押さえの後，斜め方向に条線を明瞭に残す撫で調整がおこなわれる。復原口縁部径21.3cmを測る。甕**271**は，底部のみの資料である。底部はやや弧状に凹む。底部径9.1cmを測る。

須恵器は以下の資料を示す。

壺**305**は，口縁部の小破片資料である。口縁端近くまでの外面に格子目の叩き目が残される。口縁端近くでは一部，撫で調整により消されている。復原口縁部径17.6cmを測る。

蓋**251・252**は，ともに1/4程の破片資料である。**251**は，頂部から1/3の高さの位置まで回転箆削りをおこない，それに対応する内面には内面を往復する方向の撫で調整をおこなっている。復原口縁部径13.3cmを測る。**252**は，頂部外面に掻き目調整をおこなう。対応する内面には内面を往復する方向の撫で調整をおこなっている。

坏身**257**は，小破片の資料である。復原口縁部径11.8cmを測る。

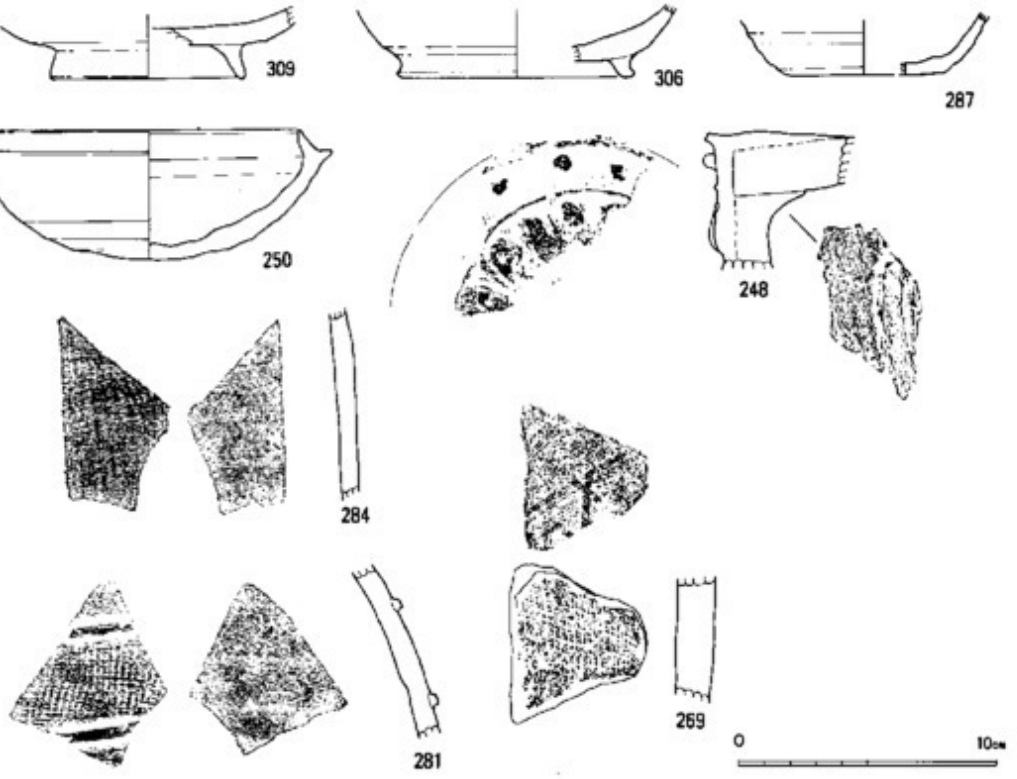


図11　流路（遺構２）３b層出土遺物実測図（1:3）

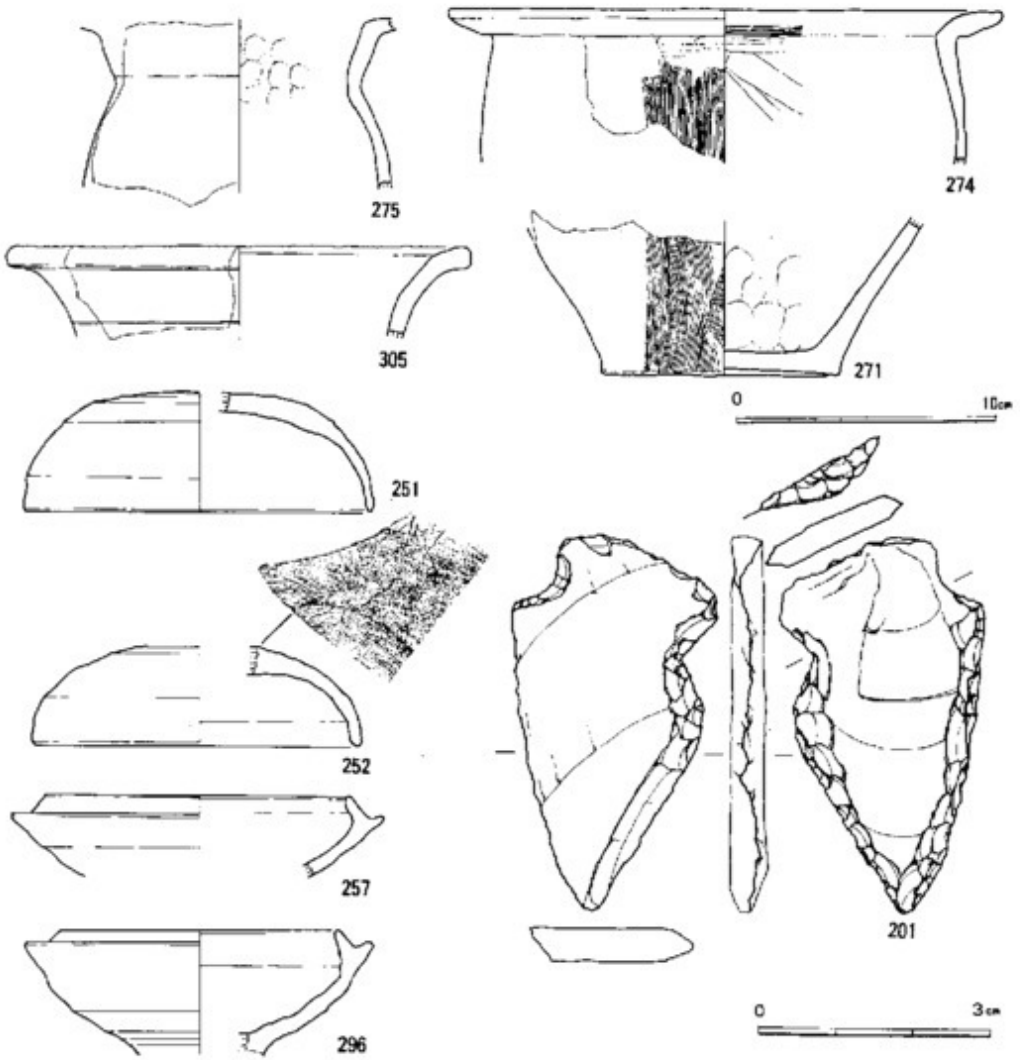


図12　流路（遺構2）3c層出土遺物実測図（1:3）

高杯296は，坏部の1/4の資料である。外面には自然釉がかかっている。復原口縁部径10.7cmを測る。

出土資料には縄文時代の遺物が含まれていた。石匙201は，素材の打面を一辺とする三角形状の剥片の2辺に片面からの調整をおこなって刃部としている。つまみ部の抉りのみ両面からの調整によって造りだしている。刃部とする片側の縁の一部に磨り潰した様な面が生じている。石材はいわゆる安山岩製で，器表の風化は顕著でなく，灰色を呈す。上述する部分のほかに磨耗などは顕著でないことから，これが使用などによる結果を示すものである可能性を考えられよう。長さ7.2cm，厚さ0.7cmを測る。

3ｄ層出土遺物（図13・14）

上位の層と比べて，比較的大きな破片資料が出土した。出土位置は，溝底に近い部分に図示できる資料が多い傾向がみてとれる。

弥生式土器は，1個体の資料が，狭い範囲にまとまって出土したものもある。壺273は底部の小破片資料である。復原底部径4.2cmを測る。甕270・272・276のうち270は下半部で1/2の資料，272は上半部で1/3の資料である。272は，口縁部近くの外面に口縁に平行する撫で調整の後，刷毛目調整をおこなっている。内面は全体にやや左上がりの撫で調整が観察される。口縁端部は撫で調整により上方にはみ出しを生じている。復原口縁部径19.8cmを測る。土師器甕276は口縁部の小破片である。口縁部外面に細い沈線を1条もつ。内面は，箆削り状の強い撫で調整がおこなわれている。

須恵器は各時期の資料が混在する。

蓋313は小破片の資料である。頂部に近い外面に回転箆削りをおこなっている。復原口縁部径10.3cmを測る。254は1/4の破片資料である。頂部は箆切り離しのままで，対する内面に内面を往復する方向の撫で調整をおこなっている。復原口縁部径10.5cmを測る。

蓋264・291・293は，つまみをもつ。264が1/4の破片資料，他は小破片の資料である。264・291は内面にかえりを持つ。264の頂部から1/2の高さの位置まで回転箆削りをおこなう。291は頂部が平坦で，その部分に回転箆削りがおこなわれる。その点，293も同様である。いずれも外面の箆削りに対応する内面に内面を往復する方向の撫で調整が行われる。264・291・293はそれぞれ復原口縁部径14.6cm，15.1cm，15.4cmを測る。

坏260・255・258・259のうち，1/4が遺存する259以外は小破片の資料である。260は外面底部よりやや上から1/3程の高さの位置までに回転箆削りをおこなっている。復原口縁部径10.5cmを測る。255は，外面底部から1/3程の高さの位置までに回転箆削りをおこなっている。復原口縁部径12.2cmを測る。258の底部はヘラ切り離しのままで，対する内面の1/3の高さの位置までに撫で調整をおこなっている。復原口縁部径12.6cmを測る。外底面に，連続する山形の線刻がある。259の底部は箆切り離しのままである。対する内面の中心部に往復する方向の撫で調整をおこなっている。外底面に線刻がある。復原口縁部径9.2cmを測る。

坏にはさらに，高台付きの資料（265・263）と平底の資料（262・292）とがある。265が口縁部を大きく欠きながら各部の遺存する資料である他は，1/3乃至小破片の資料である。265・263の高台は，平底の底部外縁に沿う位置にある。共に内面に内面を往復する方向の撫で調整を行う。265・297は，坏部の破片資料である。復原口縁部径9.8cmを測る。

壺には各種ある。いずれも小破片の資料である。

広口壺302は叩き目調整の後，回転を利用した撫で調整をおこなっている。外面には自然釉がかかる。口縁端部の内面の荒れが著しい。小形の広口壺299は，全体に回転を利用した撫で調整

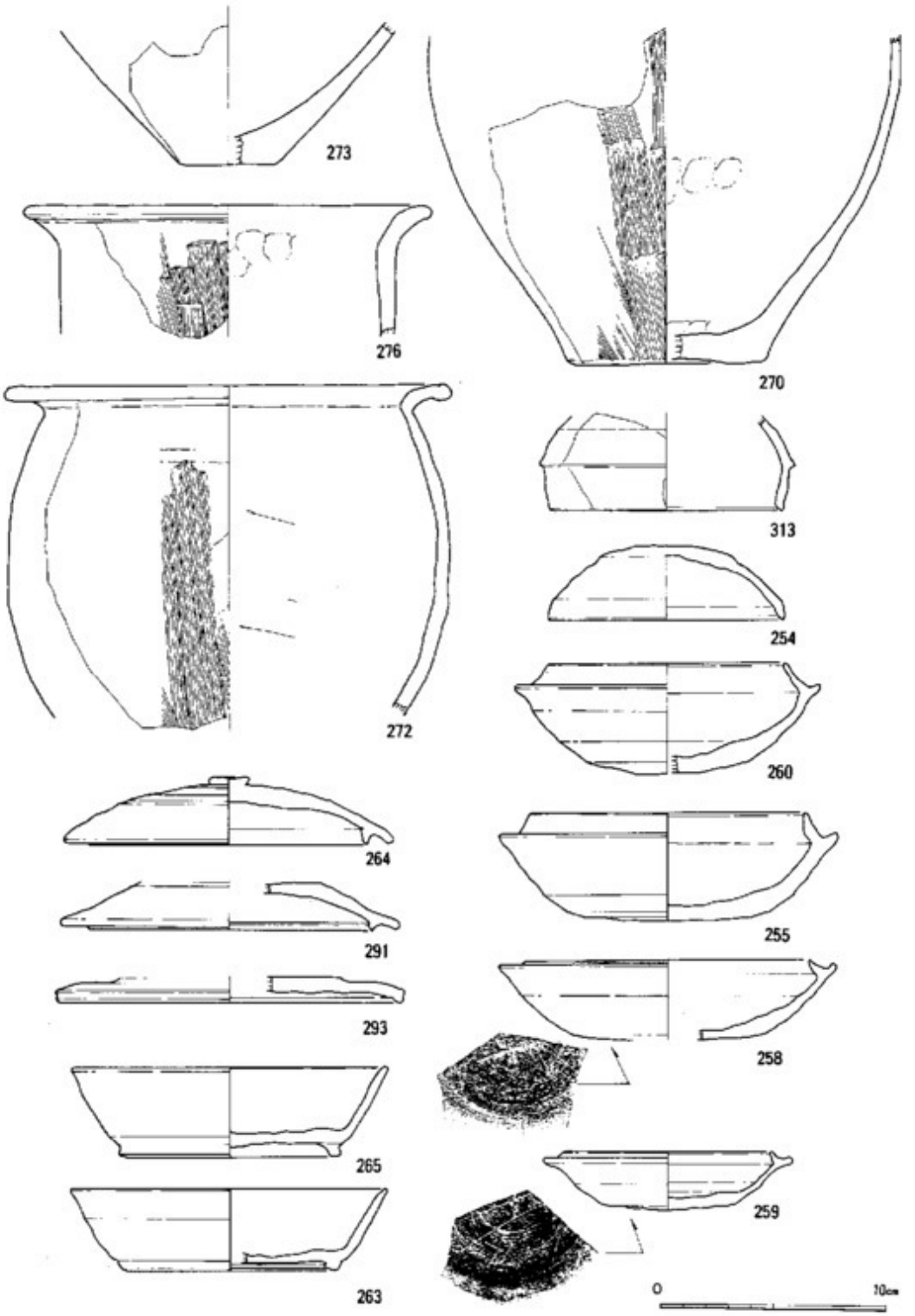


図13　流路（遺構2）3d層出土遺物実測図 1（1:3）

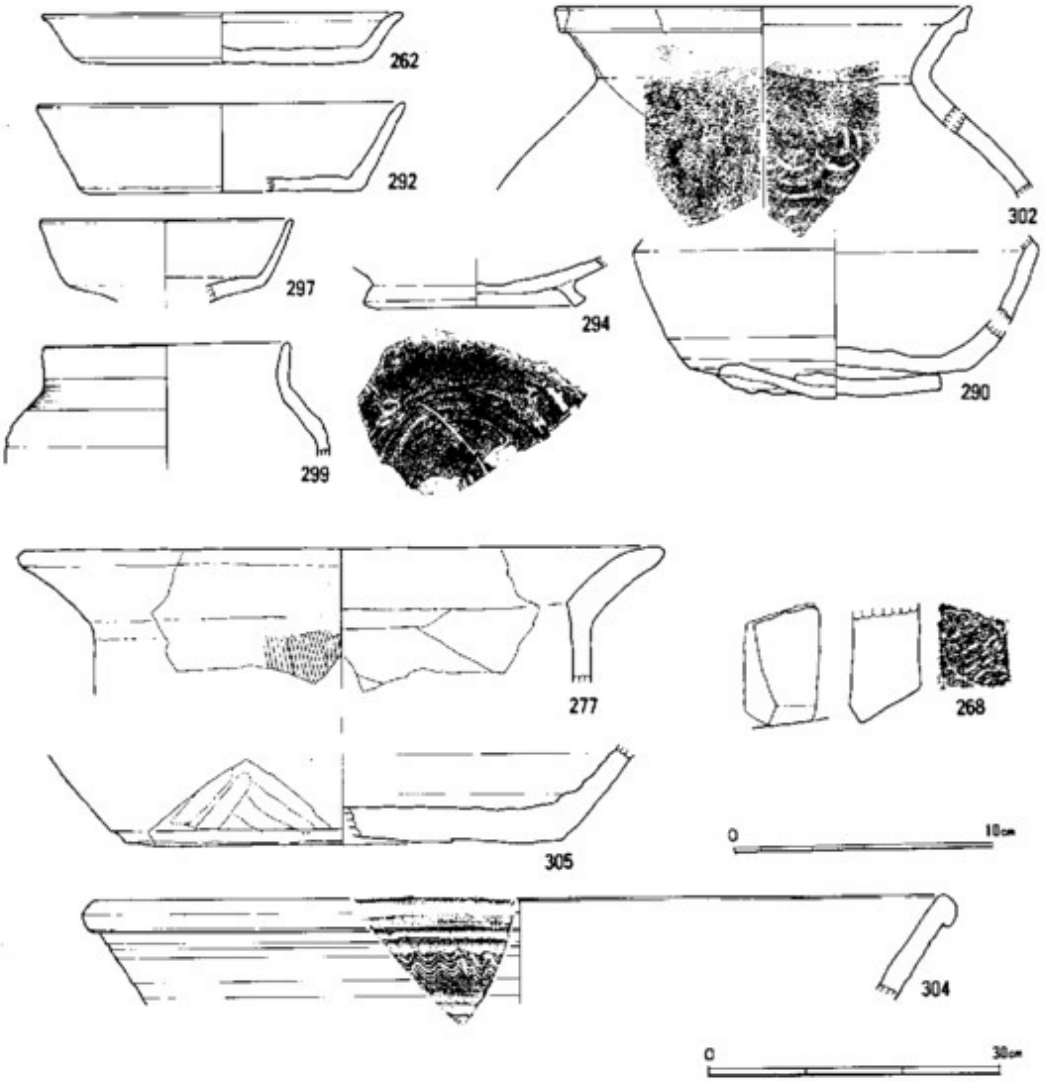


図14　流路（遺構２）３d層出土遺物実測図２（1:3,1:4）

をおこなう他に肩部に掻き目調整をおこなう。302の復原口縁部径16.3cm，299の同9.5cmをそれぞれ測る。294は底部の破片資料で，広口壺のものかと思われる。外面は回転を利用した撫で調整，内底面には底面を往復する撫で調整がおこなわれる。高台内底面には高台貼り付け後，線刻がおこなわれている。

290は，長頸瓶の体部であろうか。内外面に回転を利用した撫で調整をおこなう。底面に坏蓋が融着している。坏蓋は擬宝珠形のつまみをもに，内面にかえりをもつ。つまみ部を上方に向けた状態で融着している。焼き台の可能性もあろう。

305は，壺の底部であろうか，平底で内面には強い回転を利用した撫で調整が残されている。

外面には斜め方向で短い単位の撫で調整が交差するようにおこなわれている。底部と接する体部外面に強い撫で調整による凹線が1条形成される。外底面には篦切り離しによるものか，同心円状の段が形成されている。

甕は細片の資料が殆どである。304のみを図示する。口縁部の小破片である。口縁端部は折り返しにより成形している。外面には回転を利用した櫛描きの波状文が施されている。強いて口縁部径を復原するならば，その値45.8cmを測る。

土師器は，殆どが細片として出土している。

甕277は，口縁部の破片資料である。口縁部の屈曲に対応する内面に体部の篦削りにより，稜が形成される。復原口縁部径24.9cmを測る。

瓦268は，平瓦側縁部の細片資料である。上面に縄目の叩き目が残る。軟質で，燻しがおこなわれている。

下底部で木器が出土した。曲物枠で，出土状態を図17に示す。出土状態での計測で径32cm程を測る。遺存状態不良のため図示できない。さらにその近くで，人為的な作為のされた樹幹も出土している。図17に示すように，二股の部分で切断，さらにそれより高い位置の二股部の下に，輪状に切り込みをいれている。

土壙1 (図15・16)

調査区の南壁にかかる位置にある，不整な長方形の平面形と思われる土壙である。流路の上部の層を掘り下げる時点で検出したものである。一部が流路と重複し，それよりも新しい。覆土は大まかに3層に分けられる。上層は黄褐色砂質土（真砂土），中位の層は灰色砂層，下層は暗青灰色粘土層となる。中層から下層にかけては，帯水が継続する状態にあったものかと考えられ，上層の時点で急激な埋没に至ったものであろうか。上層での埋没には，流路の南岸部で見られたような，丘陵裾からの土砂の流れ込みのほかに，人為的な埋め立ても可能性を残している。逆台形状の断面形で，南北方向の幅5.0m，確認面からの深さ1.2mを測る。

遺物は，少量が覆土中層から下層にかけて散漫に出土した。

覆土中層から須恵器坏，瓦器碗の細片の他に獣骨片等が出土した。土器はいずれも細片であり図示できない。下層からは，須恵器坏，土師器高台碗のほかに，切断痕のある木片，竹の破片，大型獣（牛馬）の四肢骨等が出土した。土器類はいずれも細片であり，図示できない。

溝 3

調査区南半部で，地山に掘り掘り込まれている。土壙1と重複するが，調査の過程で前後関係を明らかにする事ができなかった。幅0.4m，断面逆台形状を呈し，深さ0.1mを測る。

遺物は，黒色土器高台碗細片が出土したのみである。

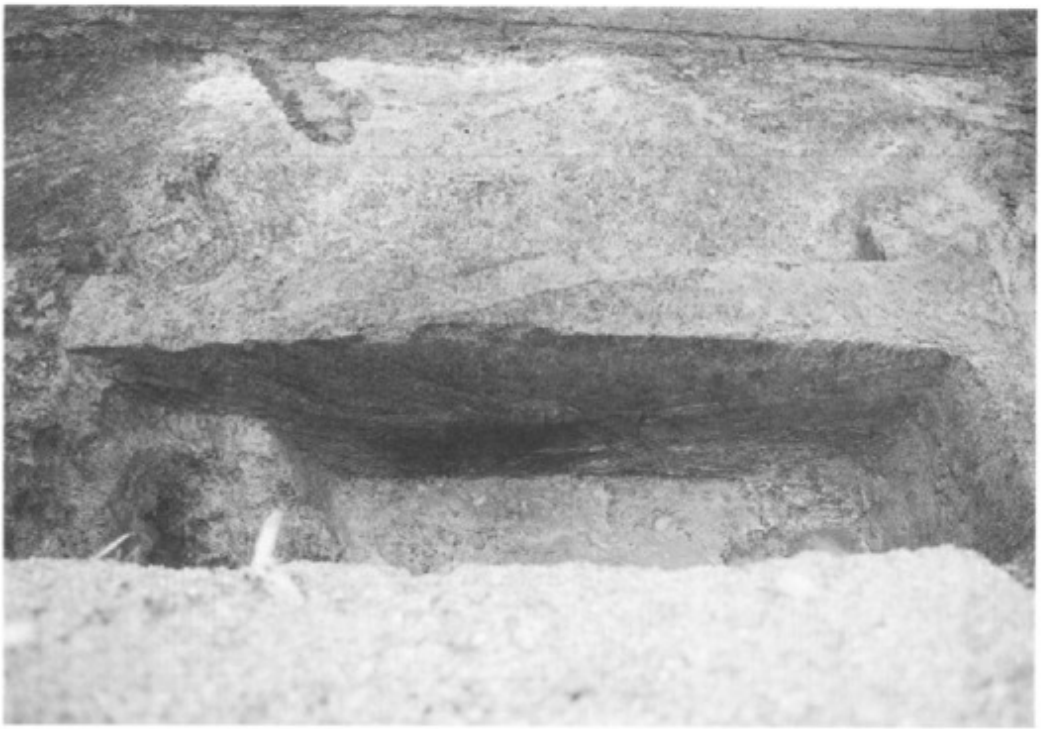


図15　土壙１　土層（西から）

図16　土壙１（南から）

図17　流路（遺構２）溝底木器出土状況（北から）

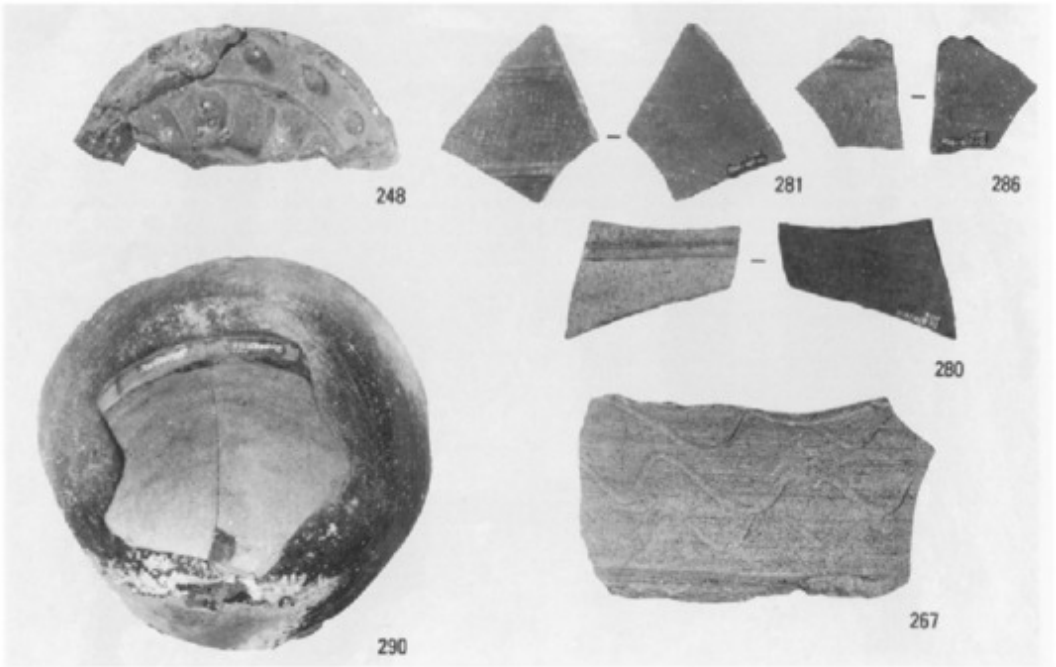


図18　流路(遺構２）出土遺物

Ⅱ－3　Ⅱ区の調査と成果

Ⅱ－3－a　Ⅱ区の調査

道路予定地南端部の調査区である。調査は道路幅６ｍの区域内で行ったため，安全のための引きなどを除いた，幅５ｍ余，長さ39m 程の調査区となった。丘陵裾で南の谷方向へと下る緩斜面に位置している。調査区北端と南端での調査面の比高は，南端近くで段落ちのあることもあって，1.9m を測る。調査は平均して0.4m 程の厚さの表土を機力により除去したのち，人力による遺構の掘り下げにかかった。地山は北側1/3程が風化土，その南側ではそれを覆うと思われる砂礫層である。遺構はすべてこの面で検出された。遺構の殆どが溝とするものである。この砂礫層については調査区南半部に深掘り調査区を設け，調査面から１ｍ程の深さを掘り下げた（図21）が，層中から遺物の出土はなかった。以下，遺構番号順に報告する。

図19　Ⅱ区全景（北から）

Ⅱ－3－b　Ⅱ区出土の遺構と遺物

溝　4（図23～26）

調査区の南端部を斜めに，北から南へ下る溝である。調査区内では，溝の幅は一定せず，調査区西壁側で1.9m，東壁寄りで2.3m を測る。溝の断面は，半円形状を呈す。溝の底面は，西壁から1/3程の位置で段を成して東壁寄りが一段深くなる。溝の覆土は，上下に分けることができる。上層とするのは砂礫混じりの

図20　II区全景（南から）

図21　II区深掘り（南から）

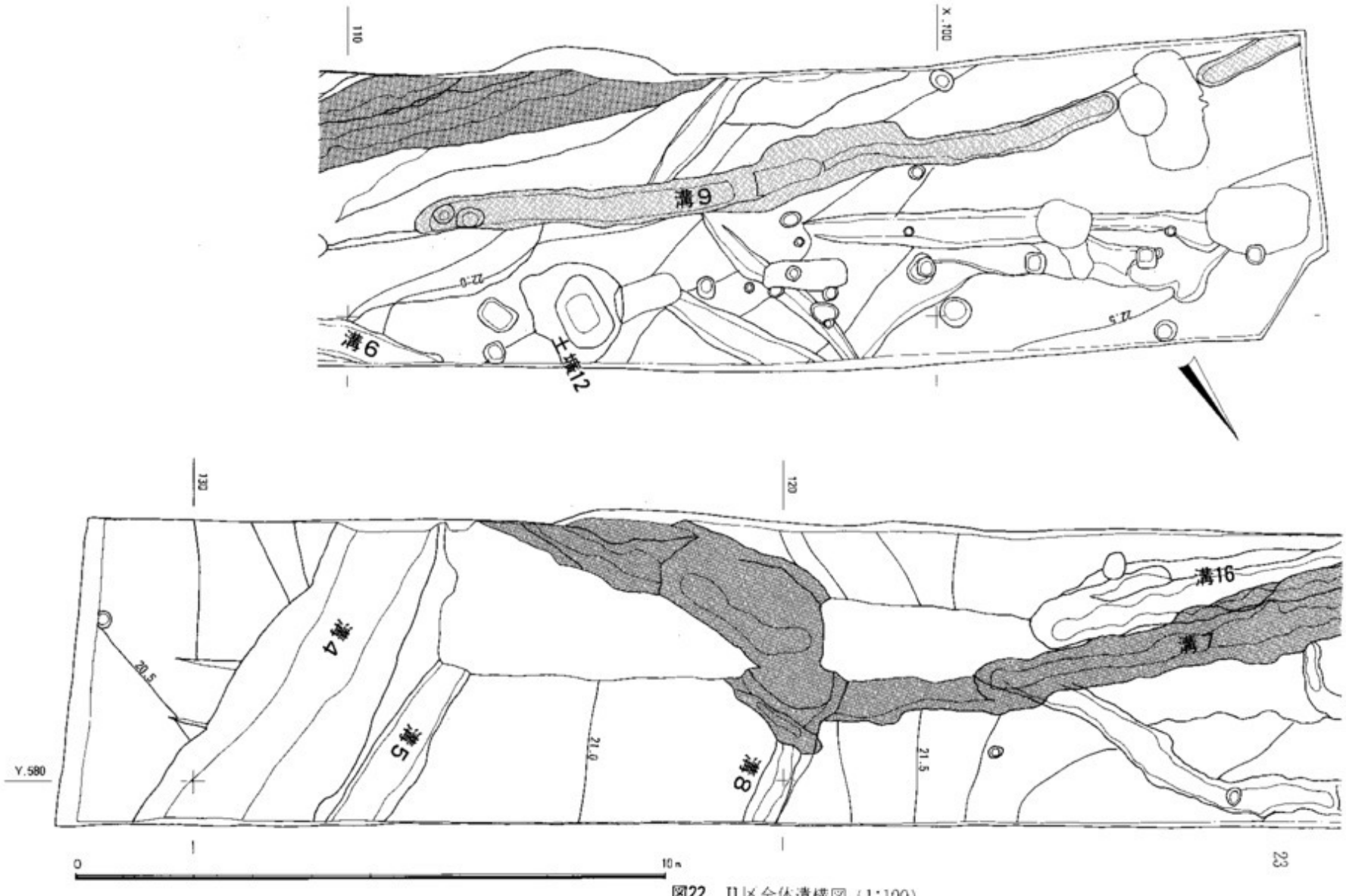


図22　II区全体遺構図（1:100）

図23　溝 4・5（北から）

図24　溝 4・5（西から）

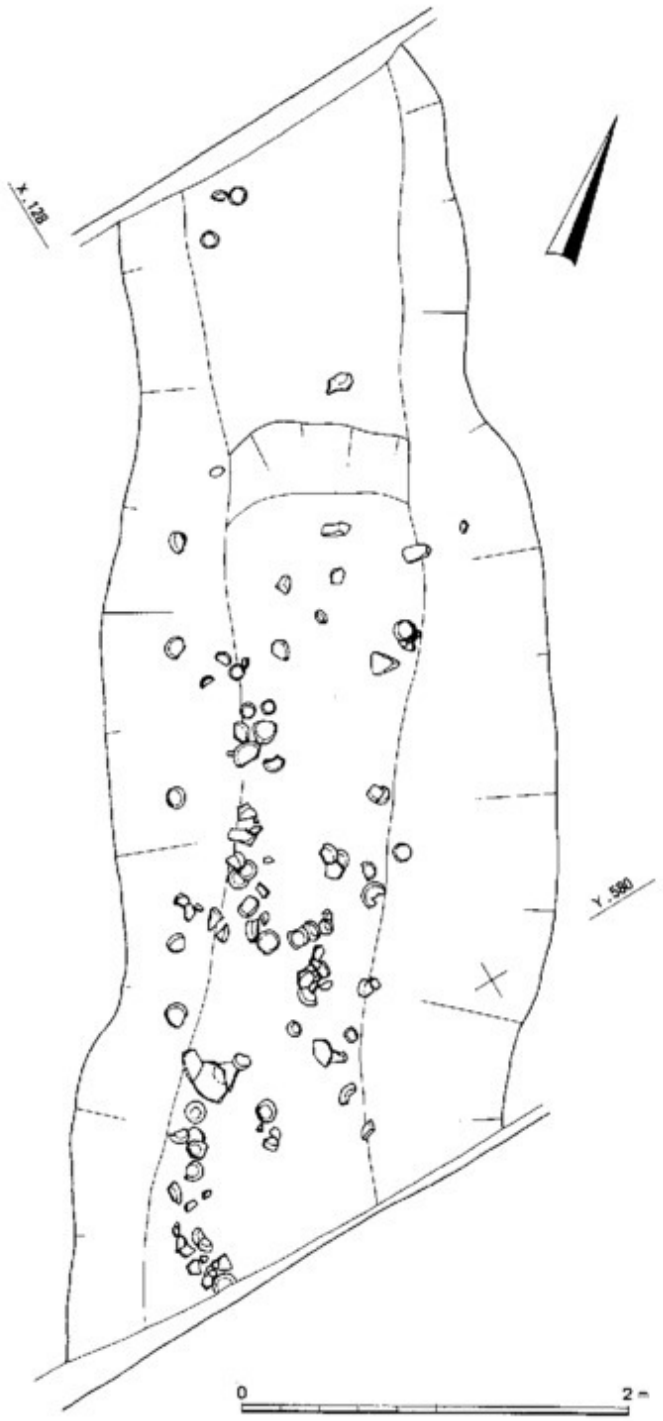


図25　溝4実測図（1:40）

暗灰褐色土層である。これの下面には，溝底の段落ち肩部から東に黄褐色の粘土層がブロック状に広がっており，その下の一段深い部位を埋める暗灰褐色土との境を成している。更に底面に沿って灰色粘土の薄い堆積がみられる。溝底の段落ち部は，調査面で溝の幅が一段広くなる位置と一致している。このことから考えると，最初調査区のなかで終わっていたものを，新たに調査区西壁を越えた位置から掘りなおしたものとも考えられる。その際の溝の底面を示すのが，覆土中位の黄褐色粘土層である。ただし，土層断面の観察による限り新たに掘られたはずの溝の立ち上がりを確認することはできなかった。

溝4出土遺物（図27～30）

遺物は，総量でコンテナ2箱の出土である。覆土上層と下層とでは，遺物の出土状況に顕著な差が見られた。上層では，遺物は覆土中から散漫に出土し，古墳時代の須恵器を目立って含んでいたのに対し，下層では，土師器坏・皿を主にした土器類を一括投棄したような出土状況がみられ

図26　溝４土層（東から）

た。また，遺物の出土量も上層と比べて多い。投棄の時期は，溝底に薄く粘土の堆積した時点と考えられ，溝底，壁に貼り付いたような遺物の出土状態である。以下に図示できる資料を掲げる。

須恵器については図示しないが，他にこの溝とは関係をもたず，その前代に属するとできる資料がある。黒色土器216は，高台碗で底部の破片資料である。土師器218も高台碗の底部破片資料である。

図27に，小形の土師器を示す。いずれも糸切り離しによる平底の器形である。図示する資料は完存あるいは一部を欠く資料を主に，全体を明確にできる破片資料を幾つか加えた。

皿 47・49・51・56・57・89・90・91・98・101・105・109・135・136・211・212・213・214は，いずれも内外面に回転を利用した成形をおこない，内底面に内面を往復する方向の撫で調整を加えている。口縁端にむけて次第に強く絞り，端部が極く薄く終わり，体部が内彎気味に外方に立ち上るものと，より下位で絞ったあとでやや力を抜いて縁端部が厚く終わるため，体部が外彎気味に立ち上がるものとがあるようにみえる。観察可能な資料の多くに板目状の圧痕をみることができた。

極く小形の坏48は，溝４出土資料中では，類例を抽出できなかった。

中形の坏 30・52・58・63・65・69・70・71・75・76・73・79・82・83・92・95・99・100・112・113・119・120・123・206・207・310・314・315・316・317も内外面とも回転を利用した成形をおこない，内底面には内面を往復する方向の撫で調整を加えている。体部の器壁を口縁端部に向かって次第に絞るも

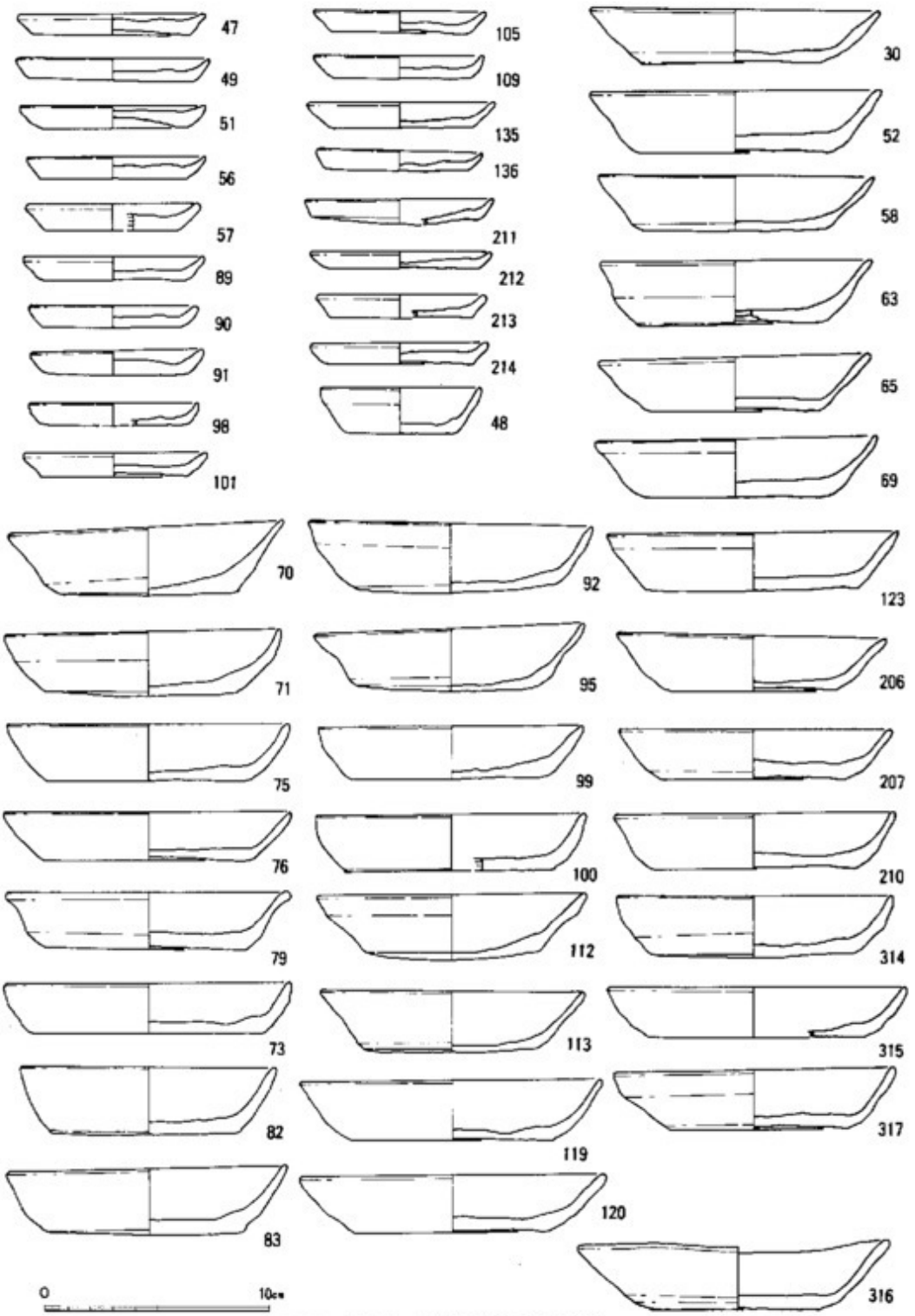


図27　溝4出土遺物実測図1（1:3）

の，下位で一旦絞って口縁端部は力を抜きやや厚く丸みをもつものとがある。

大形の坏139・67・77・215は，規模を除けば，中形の坏と異なるところはないようである。破片資料である。いずれも器表の荒れが著しく，調整は不明瞭である。

陶磁器は碗，皿の他に少量であるが鉢の資料も出土している。

白磁碗は全体を復原できる資料はない。219は底部の破片資料である。釉は高台外面までかかる。内底面に２条の圏線が刻される。低い高台をもつ資料である。

白磁皿220・221は，いずれも破片資料である。口縁部の釉を，焼成前に掻き取る。体部半ば近くの高さまでの外面に回転篦削りをおこなっている。底部は平底で，それに対応する内面に片彫りの１圏線を刻す。220は復原口縁部径10.9cm，221は同12.0cmを測る。

龍泉窯系青磁（50・222・66）には２者ある。碗66は，下半部の破片資料である。内外面に櫛描き文，内面にはさらに篦描き文を施す。釉の一部は高台内面に及ぶ。50・222の外面には鏑蓮弁文を削りだす。50は全体を復原できる資料である。内底面に擦痕が集中する。復原口縁部径16.4cm，器高4.3cmを測る。222は，口縁部の小破片資料で，復原口縁部径15.8cmを測る。

捏鉢94は，口縁部の一部を欠く資料である。内面には斜め方向の刷毛目調整，外面には刷毛目調整後，指による押さえがおこなわれている。底部は撫で調整によっている。内底面から1/3の高さの位置まで器表が磨耗している。片口をもつ。口縁部径26.0cmを測る。

土製品61は，図上での上部を欠く資料である。全体に製作時の指押さえの圧痕を残し，不整な角柱状を呈す。現状での長さ15.5cm，幅7.0cmを測る。胎土に粗粒砂を顕著に含み，軟質である。

石鍋は滑石製で，いずれも小破片あるいは細片の資料である。遺物の総量の割りには顕著である。

225は，口縁部の小破片資料である。口縁部に向かって内彎気味に広がる器形であろうか。口縁をやや下って鍔を作りつけている。口縁上端面から内面につづいて器表は平滑に磨かれている。外面には鑿痕が明瞭に残る。鍔の部分は研磨されて平滑である。口縁部上端面から外面の全体に煤状の付着物が残るが，特に鍔上端部以下は厚く付着している。復原口縁部径32.2cmを測る。226は，口縁部の小破片資料である。口縁部に向かい内彎しながら内傾する。口縁端から縦方向に耳を作り付けている。耳には，四角い孔が穿たれている。内面は研磨により平滑な面を成し，外面は口縁に平行に稜を残すように鑿により削りだされている。復原口縁部径21.9cmを測る。237は，底部の細片資料である。内外面に鑿痕が残る。平底で底部の厚さ1.6cmを測る。227は，口縁部の細片資料である。口縁部端の高さから縦方向の耳状の高まりを作り付ける。耳とするものがごく低い点，疑問である。内面には，鶴嘴状の刃先をもった工具痕が残される。内外面とも研磨によるものか，稜部が丸みを帯びている。

204は，弥生時代の資料である。石包丁で，両端を欠く。輝緑凝灰岩製。厚さ0.6cmを測る。

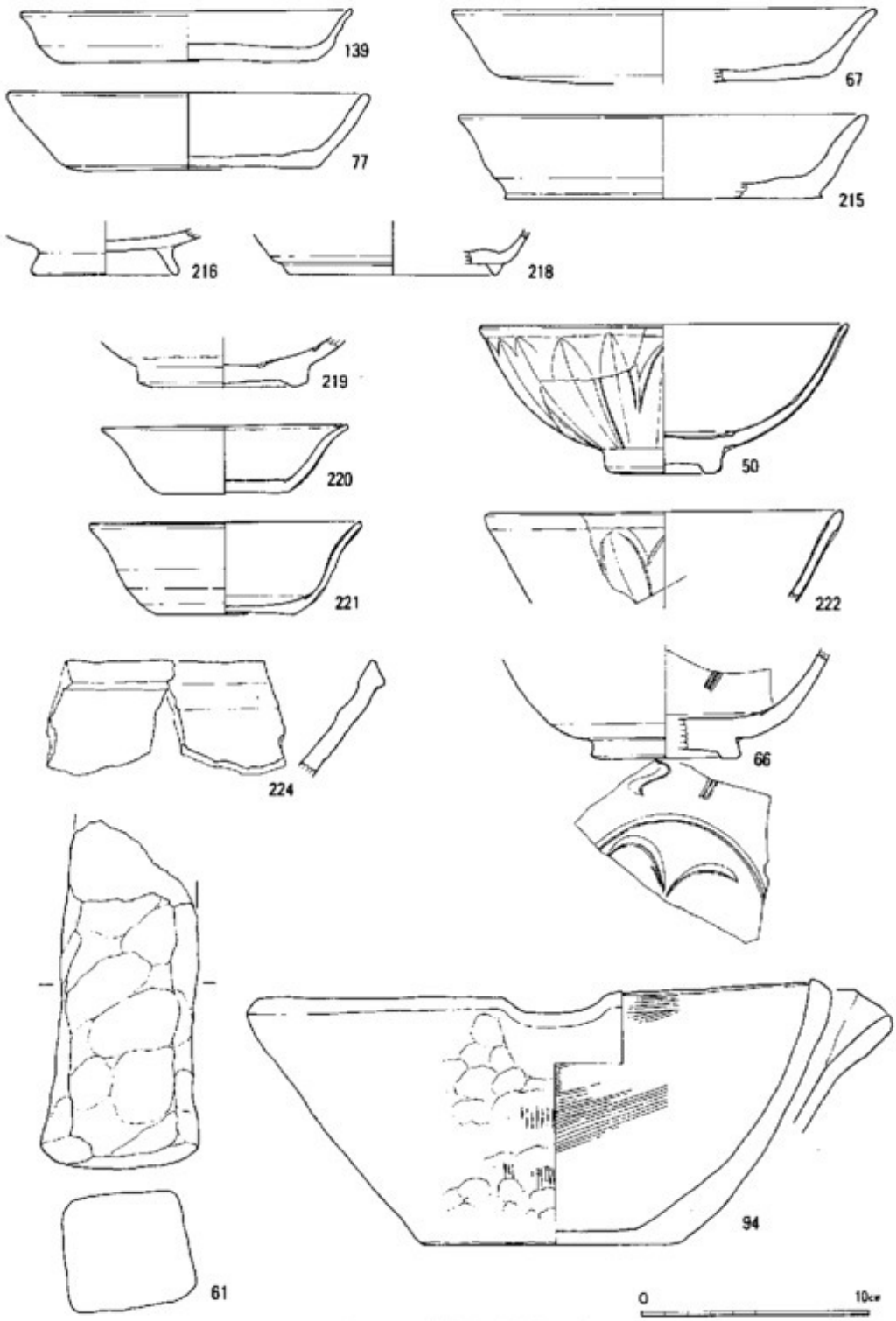


図28　溝4出土遺物実測図 2（1:3）

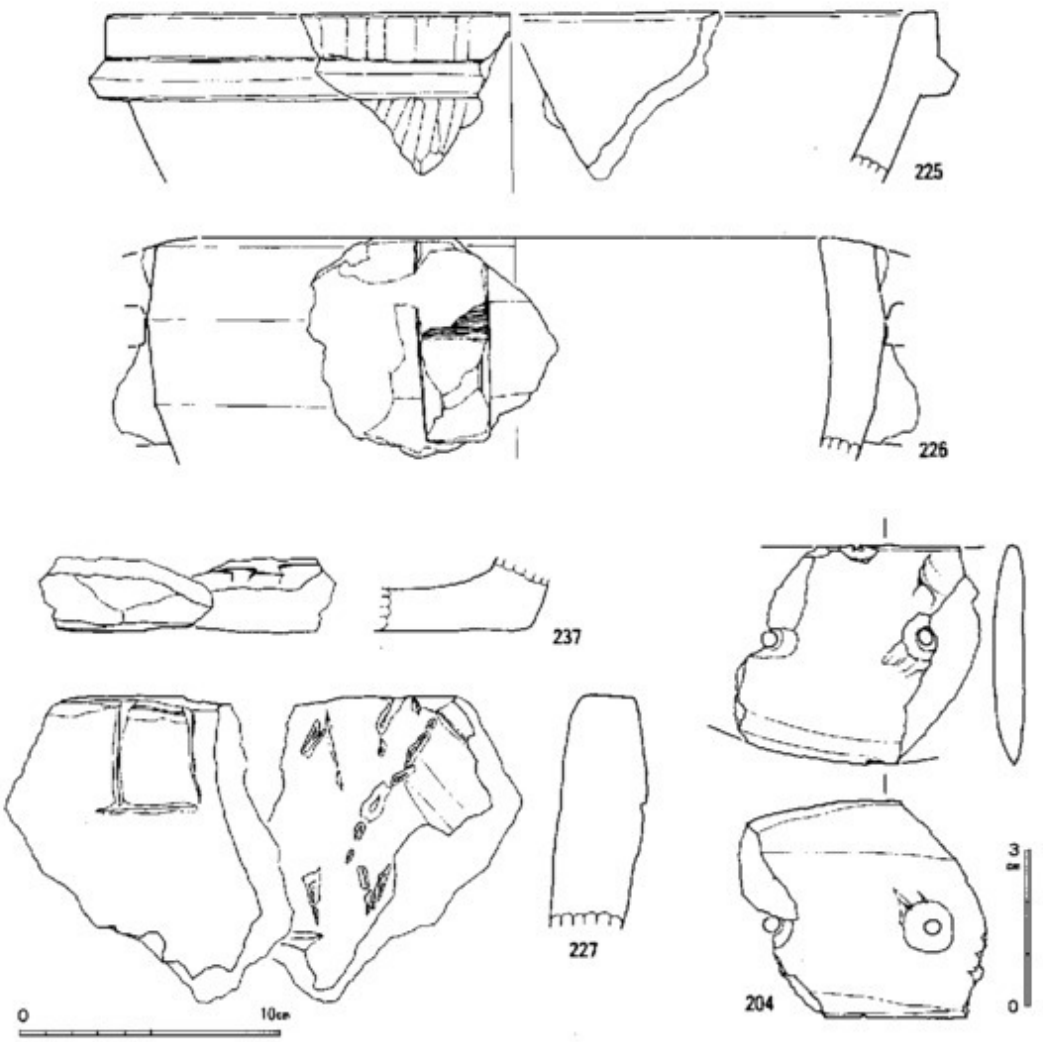


図29　溝４出土遺物実測図３（1:3）

溝　5　（図23・24）

溝４の北に位置し，溝４と平行する溝である。

浅い皿状の断面を呈す。幅0.9m，深さ0.1～0.2m を測る。調査区東壁に向かい，やや傾斜している。

覆土は暗灰褐色土で，溝４の上部覆土と似ている。溝底の高度は溝４よりもはるかに高い位置にある。水流などの痕跡は留めていない。溝４との関係も不明である。

遺物は少量が，覆土中から散漫に出土した。

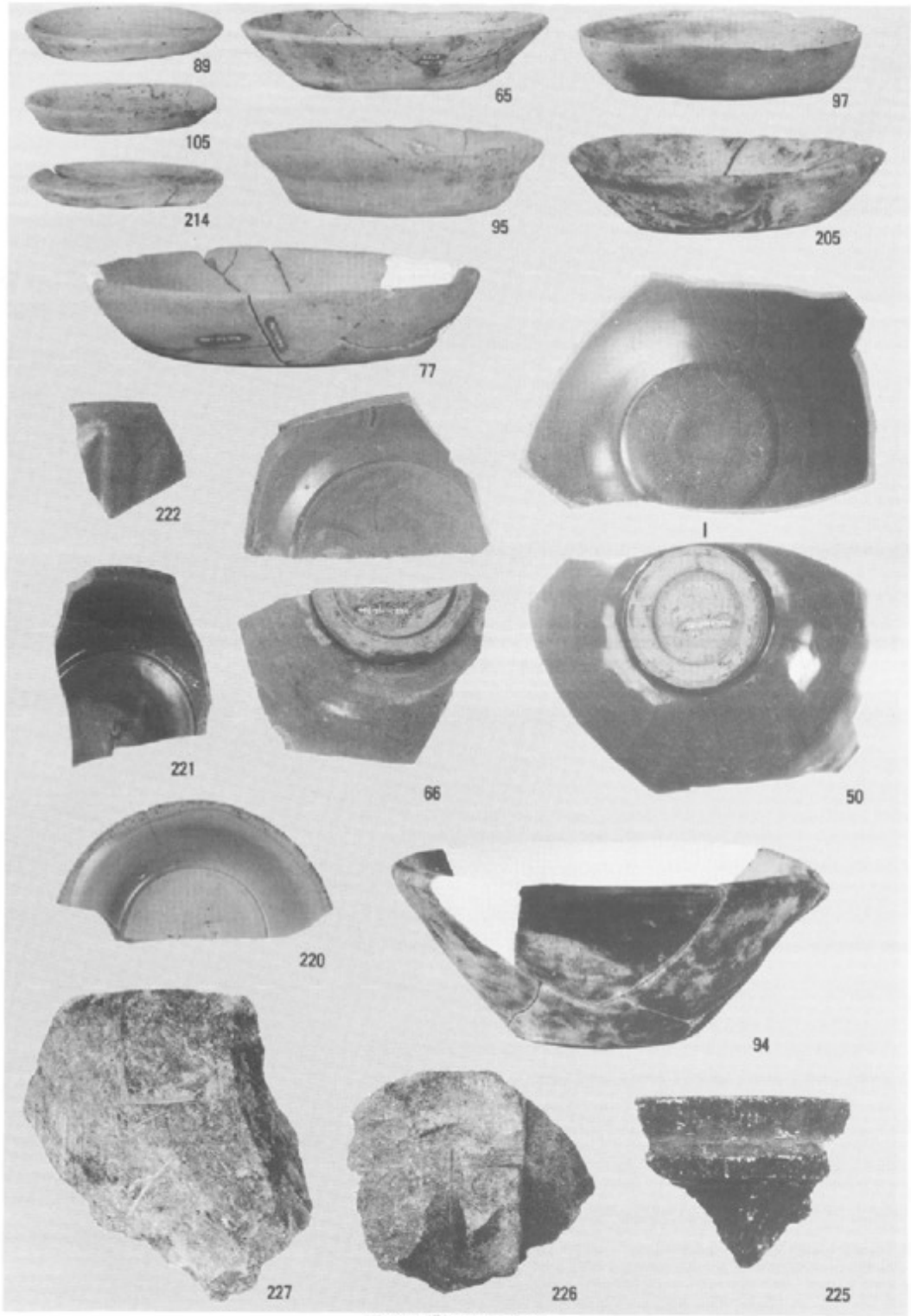


図30　溝4出土遺物

図31　溝6（南西から）

図32　溝7（南から）

図33　溝7（北から）

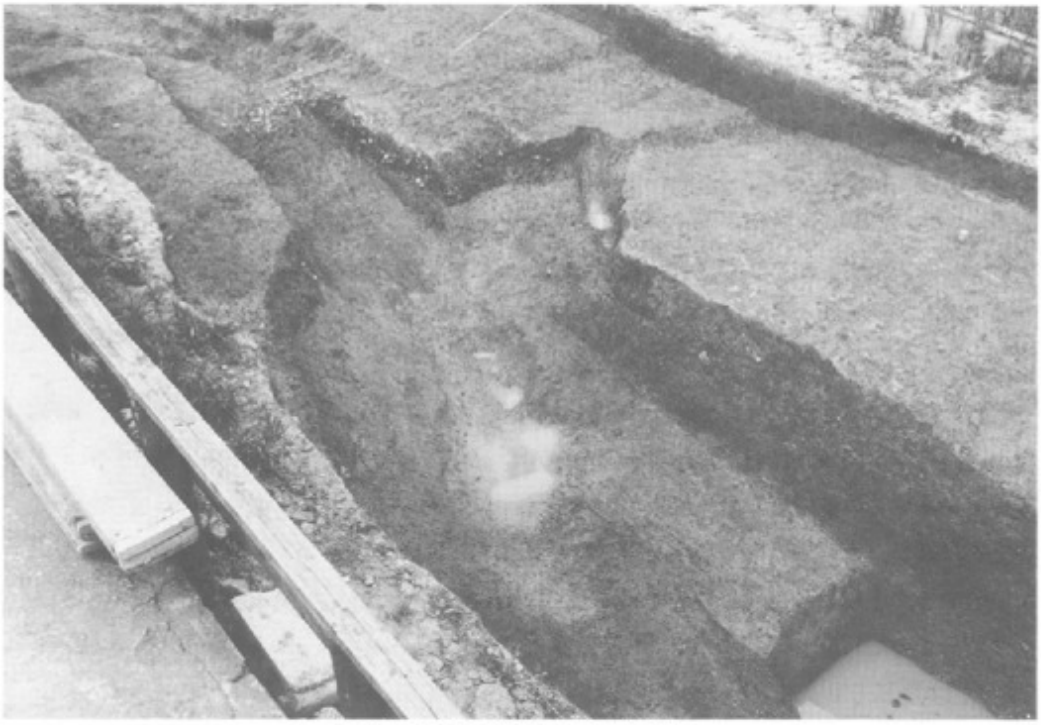


図34　溝7段落ち部（南西から）

図35　溝８（北西から）

溝　6　（図31）

調査区東壁から南西方向へ蛇行しながらのびる。溝７と重複し，新しい。断面形は深い皿状を呈し，覆土は締まりのない，明褐色の砂質土である。

遺物は覆土中から古墳時代の土師器・須恵器，糸切り底の土師器，石鍋のいずれも細片が出土している。覆土の状態から，ごく新しい時期のものかと考えられる。

溝　7　（図32～34）

調査区西壁から北西，西へと緩く弧を描いて流れる溝である。かなりの比高を流れ下る溝で，調査区内の南に寄った位置で礫層に当たって一旦浅くなった後急落し，水落ち状の抉れ部を形成している。この位置より上流側では，溝の断面は２段の傾斜をもったものとなっている。その上部は緩い，下半部は急な傾斜をもった，逆台形状の断面形を呈す。覆土は段の部分で上下に２分でき，上層は砂礫混じりの暗褐色土，下層は粘土味の強い暗褐色土となる。

北部分での幅1.0m，深さ0.5m，水落ち部寄りでは幅0.8m，深さ0.4m を測る。水落ち部は0.6m 程の落差をもって段落ちしている。この位置で幅，2.0m 程となる。

遺物は覆土中から散漫に出土した。

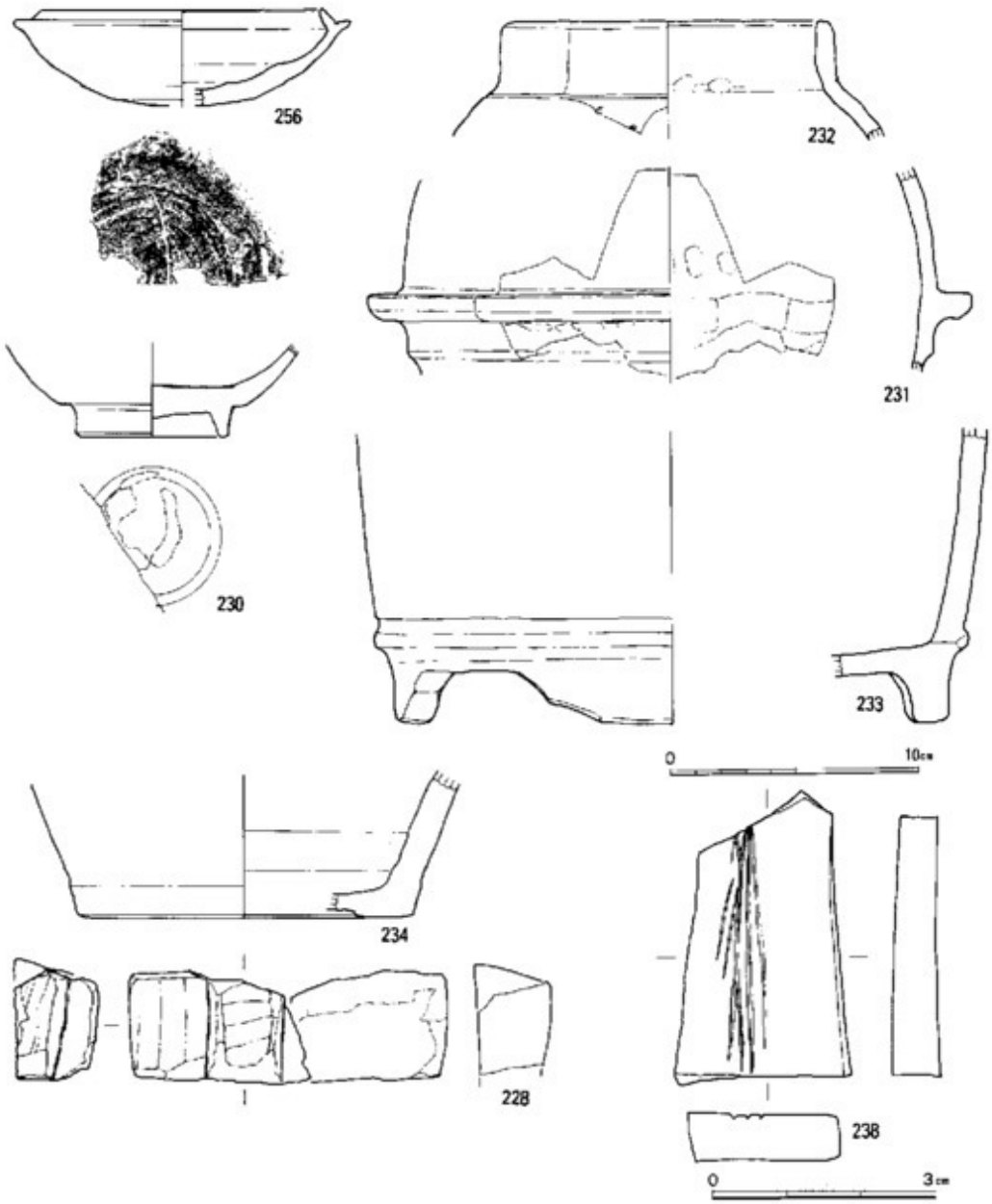


図36　出土遺物実測図1（1:3）

溝7出土遺物　（図36・37・47）

遺物は，総量でコンテナ1箱が出土した。

古墳時代後期の土器類が大半を占めるが，それに前後する時代の遺物が含まれる。

弥生時代の遺物は，弥生式土器の細片が出土している。

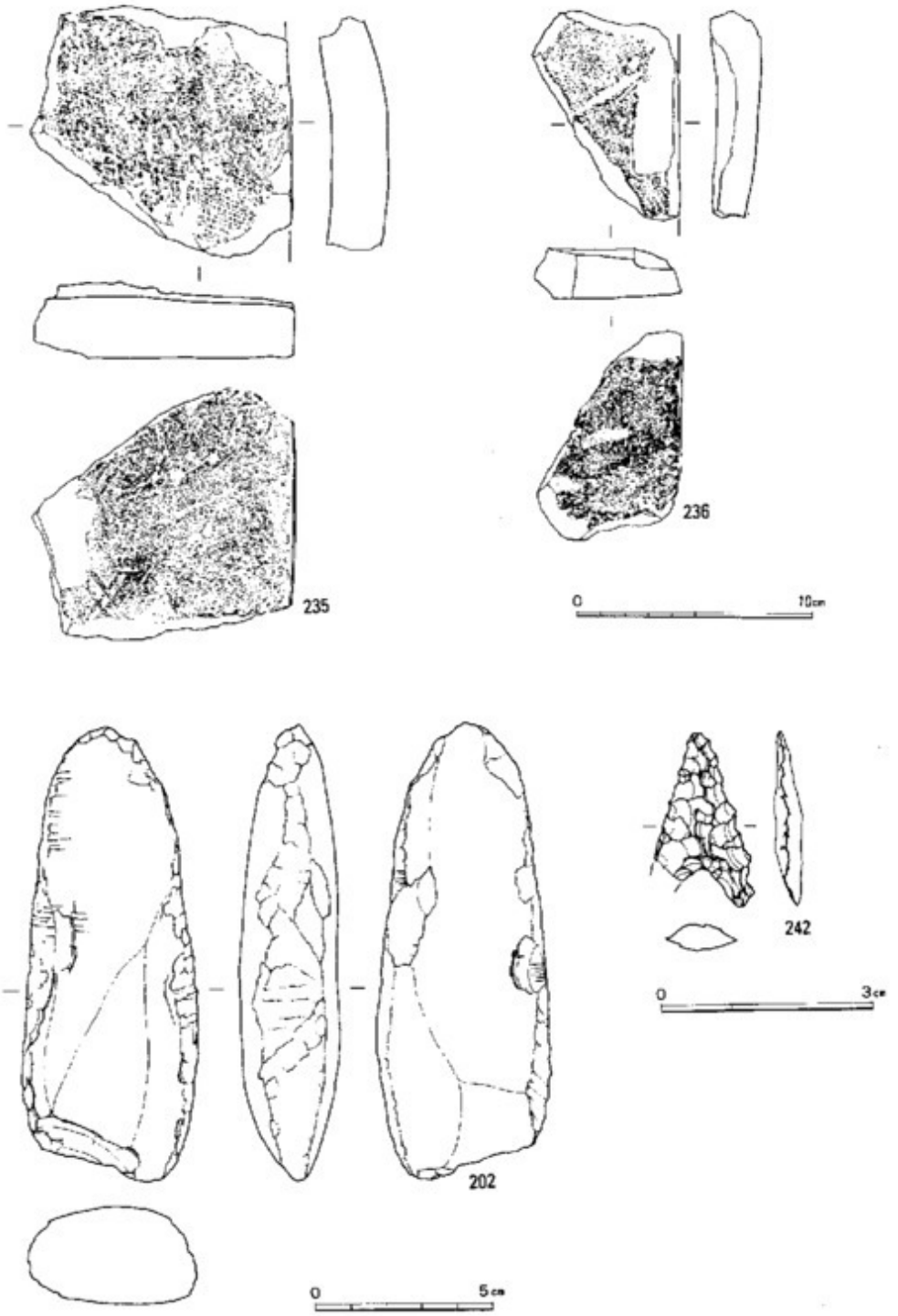


図37　溝7出土遺物実測図 2 (1:3)

古墳時代の遺物には，土師器甑把手が顕著に含まれる。また，須恵器には，報告中には図示しないが，坏類を主としながら各種器形の資料が含まれている。図示する256は，坏の破片資料である。復原口縁部径11.3cmを測る。外底面に篦描きの線刻をおこなっている。

青磁230は，底部のみの資料である。全面に施釉され，灰オリーブ色に発色，硝子状の光沢をもつ。内底面に目痕を残す。径４cm程の輪状を呈す。対する内底面には斑状にそれと見える融着物がみられる。外面の図示する部分には回転を利用した篦削り調整がおこなわれている。

瓦質湯釜232・231は，いずれも小破片資料である。口縁部232は，口縁の立ち上がり部に条線を明確に残す撫で調整，口縁上端面には篦磨き調整をおこなっている。復原口縁部形13.6cmを測る。胴部231は鍔を貼り付け部以下の内面には横方向で，条線を明確に残す撫で調整がおこなわれている。また，その上位に指押さえがおこなわれている。

233は，火舎下半部の小破片であろうか。

陶器壺234は，底部の小破片資料である。底部は高台状の上げ底である。断面で観察すると胎土の外面側1/3と残りの内面側とでは明瞭に色調を違える。 底面は他の部分に比べ焼成不良で軟質である。

石鍋228は，口縁部の細片資料である。口縁端に接する位置から縦方向に耳を取り付ける。破片の一方の端面は加工により平滑な面となっている。

砥石238は，一縁を残す破片資料である。砥面はやや凹面となり，片面には断面逆三角形状を

図38　溝９（南から）

呈する条線が残されている。資料中央で厚さ1.2cmを測る。

平瓦235・236はいずれも細片資料である。ともに前端または後端の面の一部の資料である。235は，須恵質で上面に粗い布目圧痕を，仮面に格子目の叩き目調整圧痕をそれぞれ残している。資料中央での厚さ2.6mを測る。236は器表の荒れが著しい。中央での厚さ1.9cmを測る。

石斧202は，刃部の一部を欠く資料である。側縁部に敲打痕を残す。側縁の一部に横断方向に深い条線が観察される。使用に係わる痕跡の可能性がある。蛇文岩製か。長さ13.0cmを測る。

石鏃242は，脚部の一部を欠く，凹基の石器である。黒曜石製で，長さ2.5cmを測る。調整は両面に加えられているが，側縁部のそれは比較的大きな剥離面からなっている。

溝　8　(図35)

調査区東壁から，北西方向へ向かう。溝7の水落ち部の位置でこれと接続する。溝7に向かって緩く傾斜する。断面では深い皿状を呈す。覆土は，砂まじりの暗褐色土で溝7のそれと同じである。水落ち部で溝7と合流するものであろうか。遺物は検出できなかった。

溝　9　(図38)

調査区北壁から調査区中央を南西方向に向かう。調査区半ば近くの位置から先では続きを追うことができなかった。溝の南半部は，北半部より一段深くなっている。前者部分の覆土は砂混じりの暗褐色土，後者は粘土味の強い暗褐色土であり，溝7でのそれとよく似る。幅0.7m，断面は逆台形状を呈し，南半部での深さ0.4mを測る。

溝9出土遺物　(図39)

コンテナ1/4程の総量で，覆土中から散漫に出土した。

弥生式土器，土師器の細片の他に，以下に図示する遺物が出土した。

土師器高台碗217は，底部の破片資料である。器表の荒れが著しい。

白磁碗241は，上半部の破片資料である。口縁の玉縁に対応する内面にごく浅い沈線が観察される。体部下部の外面は回転箆削りによっている。復原口縁部径18.1cmを測る。

軒丸瓦239は，瓦当面の細片である。突出した縁部の内面に鋸歯文，内側に更に珠文を配している。それより内部は接合部で脱落している。復原される瓦当面径は20.0cmを測る。

平瓦240は，側縁部の細片である。瓦質で，上面に布目圧痕，下面は不明瞭であるが，撫で調整によっているものと観察される。

石斧203は，刃部を含む破片資料である。蛤刃で，刃部の片方に寄って，顕著な条線が対応する両面に残されている。使用に係わる痕跡であろうか。石器の長軸線に対してやや斜め方向の運動によるものであることが判る。側縁は，帯状の多数の面から構成されている。凝灰質砂岩か。厚さ3.5cmを測る。

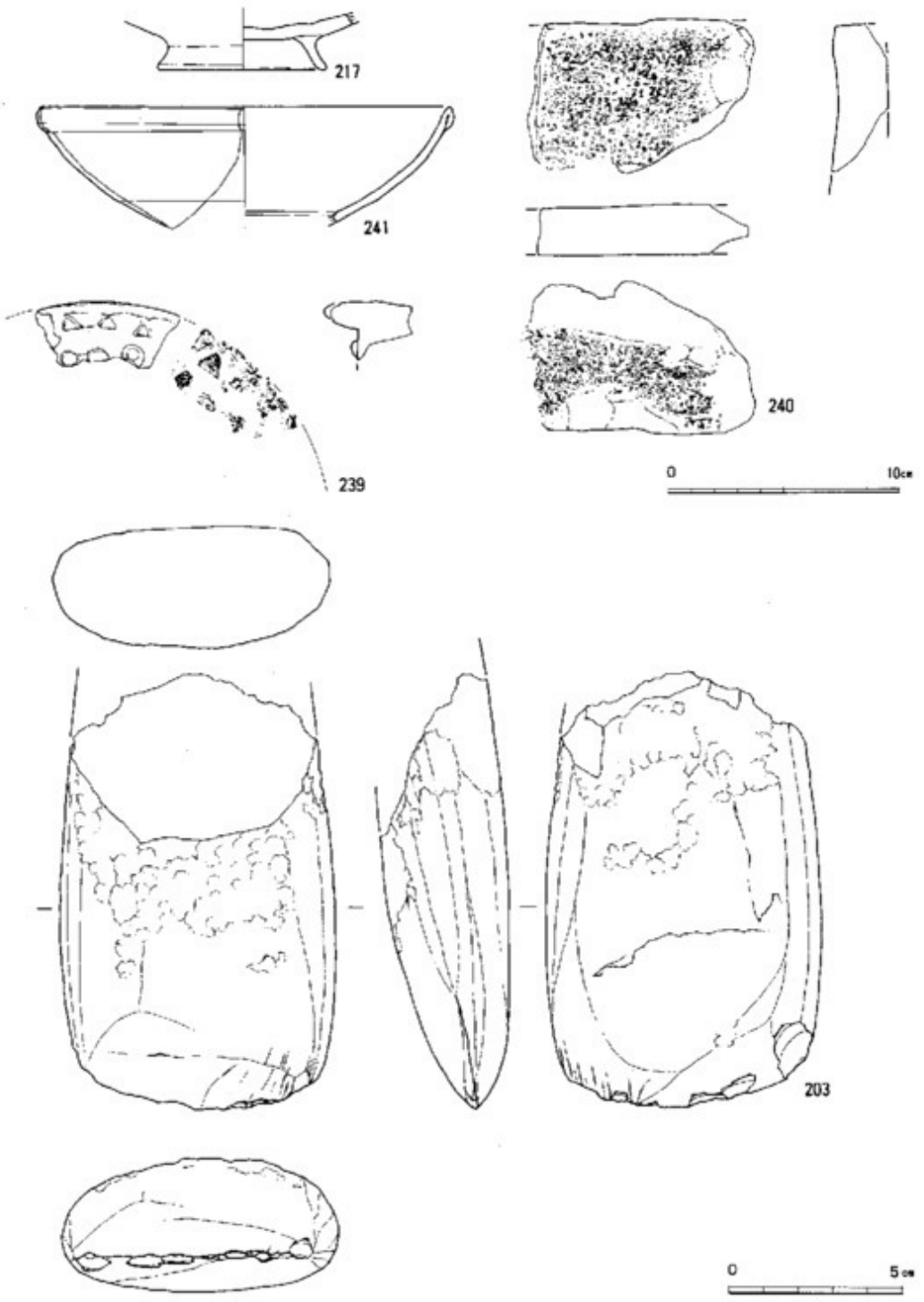


図39　溝9出土遺物実測図（1:3）

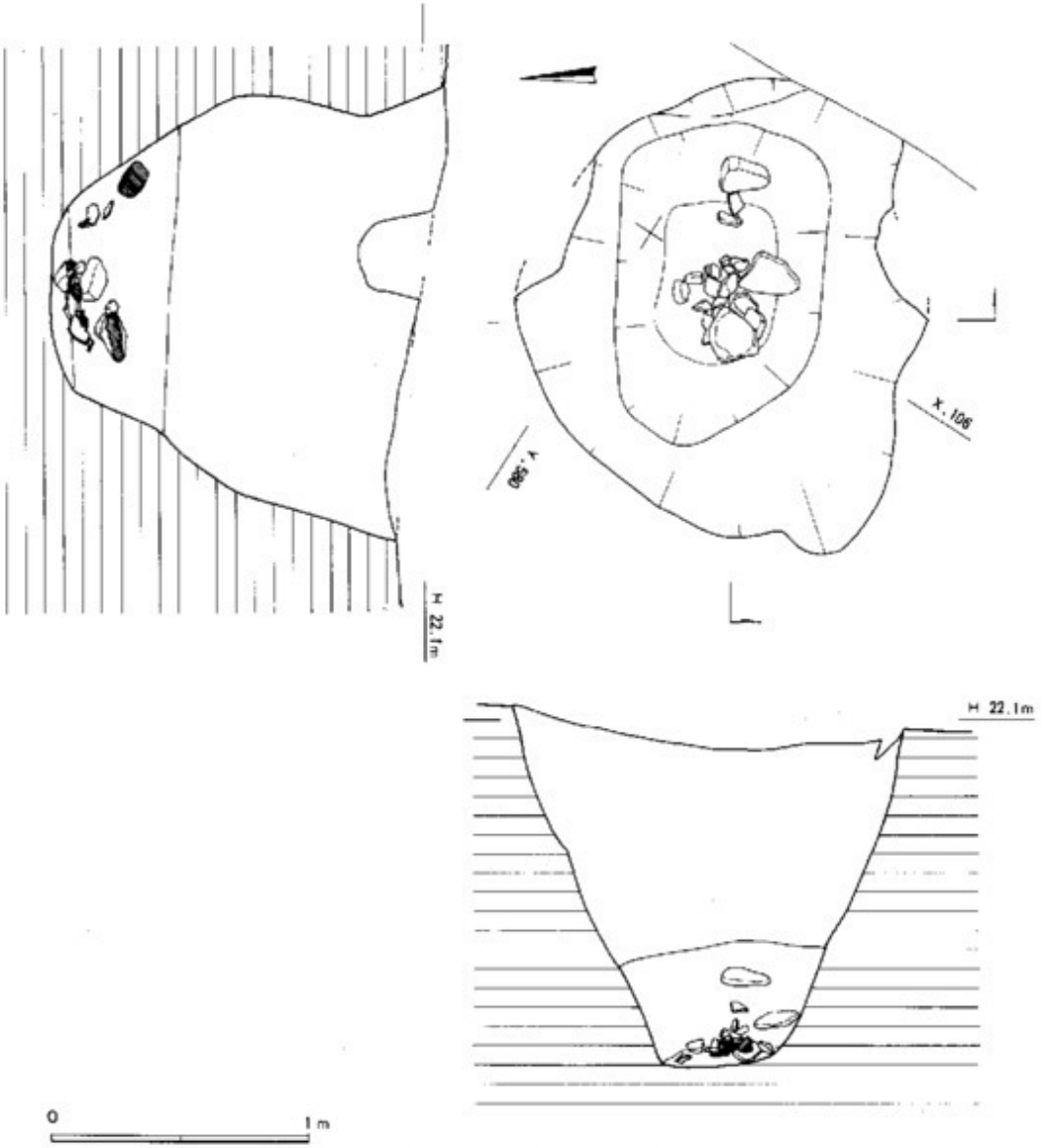


図40　土壙12実測図（1:30）

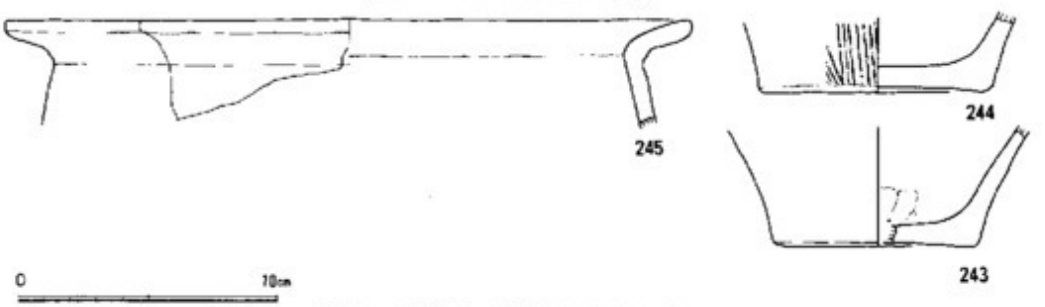


図41　土壙12出土遺物実測図（1:3）

土壙　12　(図40・43・44)

調査面で不整な楕円形状を呈する土壙である。断面をみると，壁の傾斜が一段屈曲して平面形が隅丸の長方形状の底面となる。一部では上方の壁が内側へと迫り出しており，あるいは，袋状の断面をもっいたのかもしれない。土層断面では地山ブロックかと思われる黄褐色粘質土，灰褐色土あるいは両者の混じる層が上位に，下位では褐灰色砂質土が覆土となっている。壁の屈曲部以下の覆土中から枕大から拳大の大きさの偏平な礫と，弥生式土器片が覆土の流れ込みに沿うような傾斜をもって出土した。

土壙12出土遺物　(図41)

遺物は，覆土中から散漫に出土したほかに，下部の礫出土位置から，1個体のものと思われる弥生式土器破片が集中して出土した。全て弥生式土器の破片資料であるが，殆どが細片あるいは胴部の破片である。

245は口縁部の小破片資料である。器表の荒れが著しく，調整は不鮮明である。復原口縁部径26.8cmを測る。

243・244は，底部の破片資料である。共に僅かに上げ底となっている。244の外面は刷毛目調整が粗い間隔でほどこされている。243については器表の荒れが著しく，観察できない。243の胴部下端の内面には指押さえが連続しておこなわれている。244の底部内面の周縁部分に暗褐色の付着物が斑状に残っている。

溝　16　(図45)

溝7と重複し，それよりも古い溝である。溝7と平行て，弧状に流れる。溝7の水落ち部手前で浅くなる位置までは確認できたが，それより下流側については，試掘溝と重複していることもあって続く部分を検出することができなかった。溝7と同様，横断面の状態が緩い傾斜をもって広く広がる上部と，急傾斜で逆台形状の断面形となる下部とにわけられる。その覆土も溝7と同じように，上部の幅が広い部分を埋める上層と狭い部分の下層とに分けることができる。その性状も溝7のそれと良く似る。

図42　溝16出土遺物実測図（1:3）

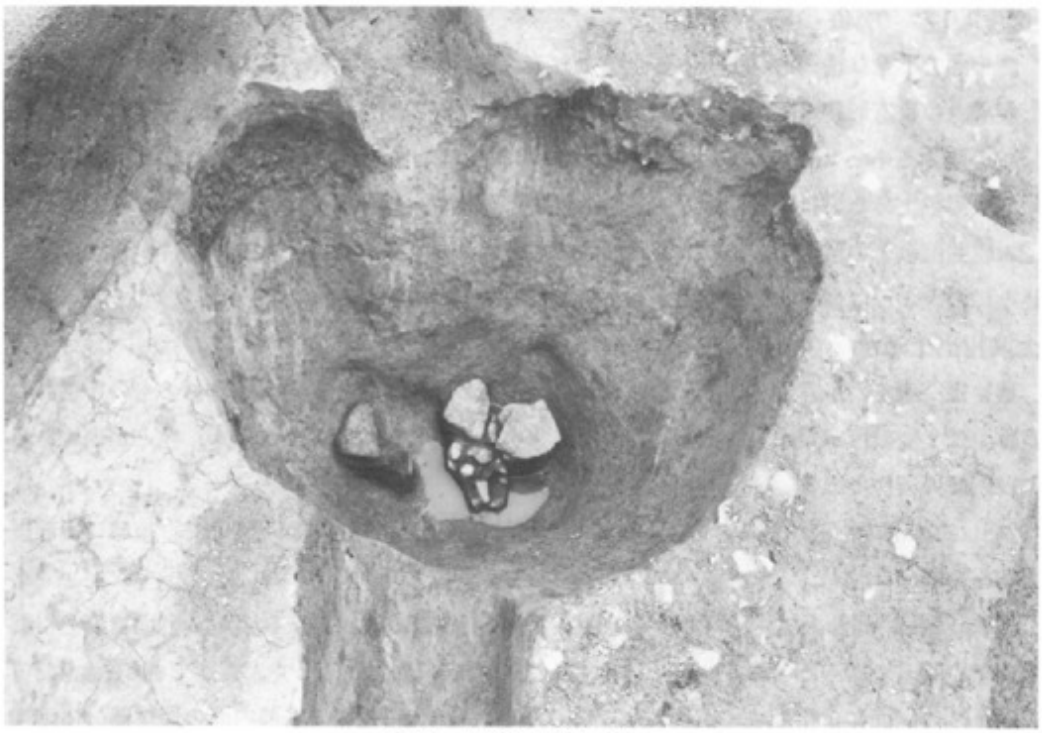


図43　土壙12（北から）

図44　溝16（南から）

図45　溝16（南から）

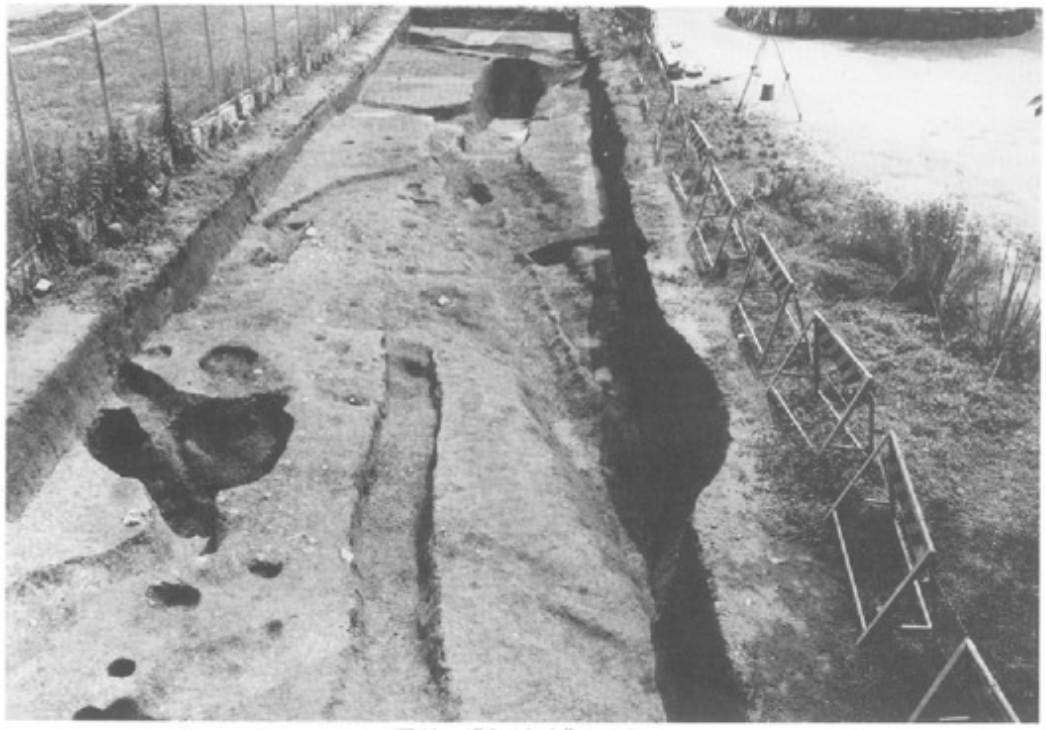


図46　溝9･16（北から）

溝16出土遺物　(図42)

遺物は総量でコンテナ1/3程が出土した。細片あるいは小破片の土器が殆どを占める。なかでも古墳時代後期の須恵器・土師器が最も顕著である。

弥生時代の遺物も出土している。**247**は，甕口縁部の小破片資料である。器表の荒れが著しい。復原口縁部径37.5cmを測る。

古代以降の資料はごく少量が出土している。

白磁碗**246**は，底部の破片資料である。高台内の中央部を一段深く削る。

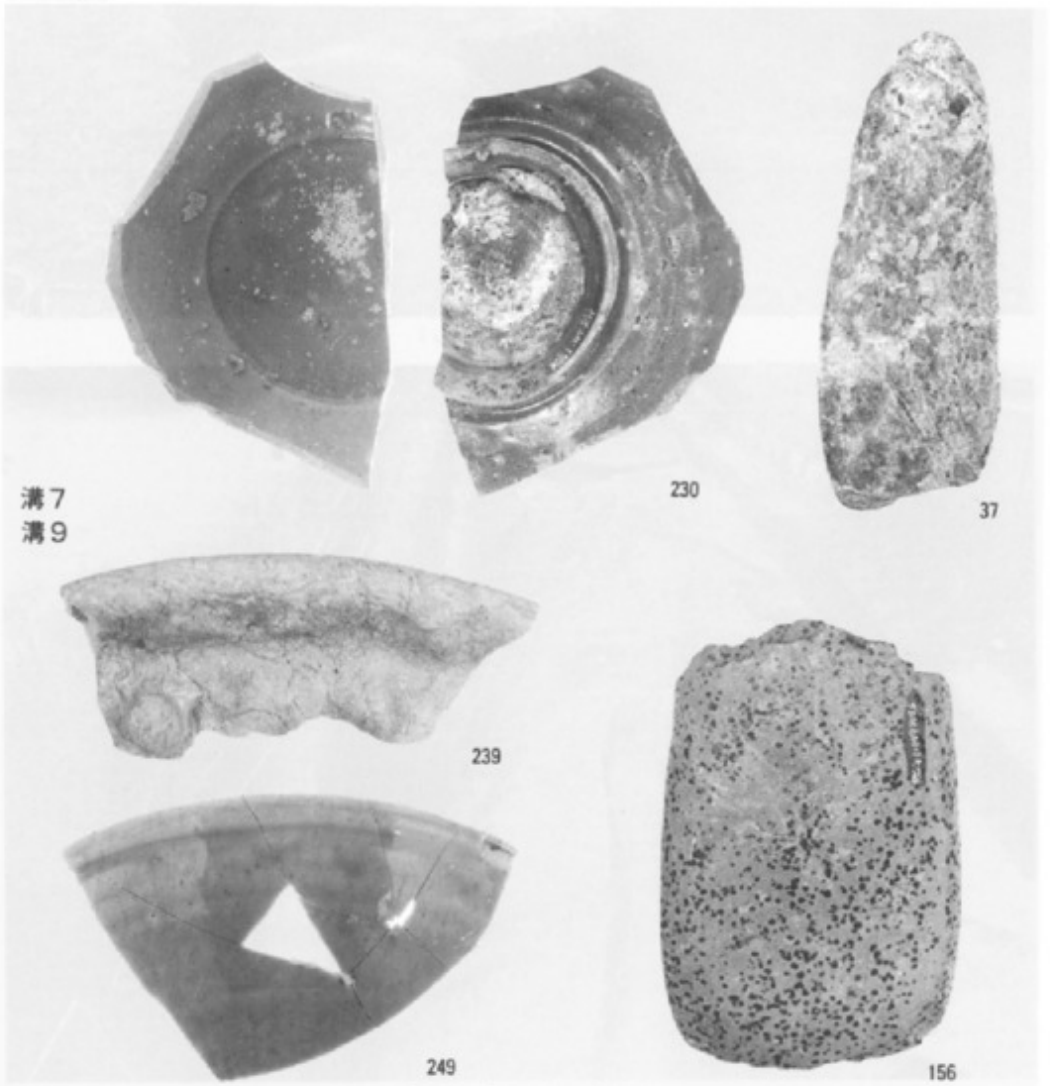


図47　溝7・9出土遺物

表1　遺物一覧表1

図	遺物番号	遺構	分類／特記	(a) 胎土 (b) 器表	計測値　口縁部径×底部径×器高 その他の計測値(cm)
27	30	4	土師器 糸切底坏	a) わずかの粗粒砂と顕著な細粒砂とを含む. b) 内外面とも灰白色. 器表は, やや荒れ.	12.6×7.7×6.9
27	47	4	土師器 糸切底皿	a) 粒砂を含む. 褐色粗粒の粒子を含む. b) 荒れが著しい.	8.3×
27	48	4	土師器 糸切底坏	a) 砂味が強い. b) 淡黄色. 荒れが著しい.	7.1×4.9×2.0
27	49	4	土師器 糸切底皿	a) 粗粒砂を含む. 粗粒の褐色粒子を含む. b) 橙色. 断面では淡黄色.	8.6×7.4×0.9
28	50	4	龍泉窯系青磁 碗	a) 堅緻. 灰白色. b) 釉は細かく発泡し, オリーブ色, 樹脂状の光沢.	16.4×4.3×6.5
27	51	4	土師器 糸切底皿	a) 精良な粘土. b) 浅黄橙色. 荒れが著しい.	8.3×6.5×1.0
27	52	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂を含む. 砂味が強い. b) 橙色. 荒れが著しい.	13.1×8.3×2.8
27	53	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂をわずかに含む (長石粒も含む). 砂味がつよい. b) 浅黄橙色.	12.3×8.1×2.5
27	56	4	土師器 糸切底皿	a) 砂味の強い生地. b) 内面淡黄色. 外面橙色.	7.9×7.3×1.0
27	57	4	土師器 糸切底皿	a) 粗粒の褐色粒子を含む. b) 橙色. 荒れが著しい.	7.7×5.8×1.2
28	61	4	土製支脚	a) 粗粒砂を顕著に含む. 断面はにぶい橙色. b) 浅橙色.	長さ (15.5) × 幅 7.0×厚さ5.
27	63	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂をふくむ外に, 褐色粗粒の粒子を顕著に含む. b) 灰白色. やや荒れ.	12.2×8.0×2.9
27	65	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂をわずかに含むほかに粗粒, 細粒の褐色粒子を含む. b) 浅黄橙色. 荒れが著しい.	12.2×6.9×2.5
28	66	4	龍泉窯系青磁 碗	a) レンズ状の空隙を生じる. 堅緻. b) 釉薄く, 浅黄色を呈す. 細かな貫状の風化.	×6.6×
27	67	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂を含む. 緻密な生地. b) 灰白色. 荒れが著しい.	18.8×14.4×3.3
27	69	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂を含む. 緻密な生地. b) にぶい黄橙色. 荒れが著しい.	12.6×8.4×2.5
27	70	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂を含む. 緻密な生地. b) 内面暗灰黄色. 外面浅橙色.	12.4×7.8×3.0
27	71	4	土師器 糸切底坏	a) 砂味が強い. b) 橙色.	11.9×8.5×2.8
27	73	4	土師器 糸切底坏	a) 褐色の粒子を含む. b) にぶい黄橙色. 荒れが著しい.	12.7×10.3×2.2
27	75	4	土師器 糸切底坏	a) 褐色の粒子を顕著に含む. 砂味が強い. b) 荒れが著しい.	12.5×9.2×2.6
27	76	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂をわずかに含む. 砂味がつよい. b) 淡黄色.	12.8×8.1×2.3
27	77	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂をわずかに含むが, 均質. b) 明黄褐色.	16.2×11.5×3.3
27	79	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂をわずかに含む. b) にぶい褐色. 荒れが著しい.	12.7×8.8×2.6
27	82	4	土師器 糸切底坏	a) 砂味が強い. b) にぶい黄橙色. 荒れが著しい.	11.4×8.6×3.0
27	83	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂を含む. 砂味が強い. 雲母片が顕著. b) 淡黄色.	12.5×8.8×3.0
27	89	4	土師器 糸切底皿	a) 粗粒砂を含む. 褐色粗粒の粒子を含む. b) 浅黄橙色.	8.0×6.6×1.1
27	90	4	土師器 糸切底皿	a) 粗粒の褐色粒子をわずかに含む. 砂味が強い. b) 内面灰白色. 外面にぶい黄橙色. 荒れが著しい.	7.4×6.4×1.0
27	91	4	土師器 糸切底皿	a) 砂味の強い生地. 褐色粗粒の粒子を僅かに含む. b) 内面淡黄色. 外面橙色.	7.7×6.6×1.2
27	92	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒の褐色粒子を含む. 砂味が強い. b) にぶい黄橙色. 荒れが著しい.	12.6×8.8×3.1
28	94	4	瓦質土器 擂鉢	a) 粗粒砂を含む. 軟質. b) 内面灰白色. 外面灰色.	26.0×11.1×11.2
27	95	4	土師器 糸切底坏	a) 細粒砂を含むほかに, 赤褐色の粒子を含む. やや砂味が強い. b) 内面浅黄橙色, 外面橙色.	12.0×7.7×2.8
27	98	4	土師器 糸切底皿	a) 砂味のある生地. b) 荒れが著しい. にぶい黄橙色.	7.5×6.5×1.0

表2　遺物一覧表2

図	遺物番号	遺構	分類／特記	(a) 胎土 (b) 器表	計測値　口:口縁部径× 底部径×器高 その他の計測値(cm)
27	99	4	土師器 糸切底坏	a) 粗砂粒をわずかに含む. b) 浅黄橙色. 荒れが著しい.	11.7×8.6×2.4
27	100	4	土師器 糸切底坏	a) 褐色の粒子を顕著に含む. 砂味が強い. b) 淡黄色. 荒れが著しい.	12.0×9.3×2.5
27	101	4	土師器 糸切底Ⅲ	a) 粗粒砂を含む. 粗粒の褐色粒子を含む. 緻密な生地. b) 浅黄橙色.	7.9×6.5×1.0
27	105	4	土師器 糸切底Ⅲ	a) 粗粒砂をわずかにふくむ. b) 浅黄橙色.	7.8×6.1×1.1
27	109	4	土師器 糸切底Ⅲ	a) 粗粒砂を含む. 砂味が強い. b) にぶい橙色. 荒れが著しい.	7.5×5.8×1.1
27	112	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂をわずかに含む. b) 灰白色.	12.0×7.7×3.0
27	113	4	土師器 糸切底坏	a) 細粒砂を含む. やや砂味が強い. b) 橙色. 外面の荒れが著しい.	11.8×7.8×2.6
27	119	4	土師器 糸切底坏	a) 砂味が強い. b) 灰白色. 荒れが著しい.	13.4×8.6×2.7
27	120	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂を含む. b) 釉は剥落して詳細は観察できない.	13.6×8.3×2.5
27	123	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂をわずかに含む. 砂味が強い. b) 灰白色. 荒れが著しい.	13.0×9.4×2.6
27	135	4	土師器 糸切底皿	a) 粗粒砂を含む. 砂味が強い. b) 橙色. 荒れが著しい.	8.3×6.1×1.1
27	136	4	土師器 糸切底皿	a) 砂味が強い. b) 淡橙色. 荒れが著しい.	7.4×6.4×0.9
27	139	4	土師器 糸切底坏	a) 砂味が強い. b) 荒れが著しい.	14.6×11.4×2.4
12	201	2 3c層	石匙	安山岩	長さ7.2×幅3.6× 厚さ
37	202	7	石斧	蛇文岩	長さ13.0×幅4.9 ×厚さ2.8
39	203	9	石斧	凝灰岩	長さ(12.5)×幅 8.0×厚さ3.6
29	204	4	石包丁	輝緑凝灰岩	長さ(4.7)×幅4.2 ×厚さ0.6
27	206	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂をわずかに含むほかは,細粒砂が顕著. 褐色の粒子も含む. b) 大部分が欠失. 遺存する部分にはスリップがけ様の状態（橙色）.	12.1×7.6×2.5
27	207	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂を含む. b) 荒れが著しい.	12.3×8.1×2.2
27	210	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂を含む. b) にぶい橙色. 荒れが著しい.	12.6×9.0×2.5
27	211	4	土師器 糸切底皿	a) 粗粒の褐色粒子を含む. 粗粒砂を含む. b) 荒れが著しい.	8.3×7.4×1.0
27	212	4	土師器 糸切底皿	a) 緻密な生地. b) 灰白色.	8.1×6.7×0.8
27	213	4	土師器 糸切底皿	a) 粗粒砂を含む. 緻密な生地. b) 浅黄橙色. 荒れが著しい.	7.6×6.4×1.1
27	214	4	土師器 糸切底皿	a) 精良. b) 浅黄橙色. 荒れが著しい.	7.8×6.2×1.0
27	215	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂をわずかに含む. b) 浅黄橙色.	18.1×14.1×3.7
28	216	4	土師器 黒色土器	a) 粗粒砂を含む. b) 荒れが著しい. 内面黒色. 外面灰白色.	
39	217	9	土師器 高台椀	a) 粗粒砂をわずかに含む. 褐色粗粒の粒子を含む. 断面は暗灰色. b) 荒れが著しい. 浅黄橙色.	×7.3×
28	218	4	土師器 高台椀	a) 粗粒砂を含む. 断面はオリーブ黒色. b) 荒れが著しい. 内面の器表は剥落.	×9.3×
28	219	4	白磁 椀	a) 堅緻. 細かな空隙を生じる. 灰白色. b) 釉は, 細かく発泡し無色透明. 貫入状の光沢.	×7.5×
28	220	4	白磁 皿	a) 堅緻. 微細な空隙を生じる. 白色. b) 釉は灰白色, 透明. 細かく発泡する.	10.9×5.8×3.0
28	221	4	白磁 皿	a) 堅緻. 微細な空隙を生じる. 灰白色. b) 釉は灰白色, 透明. 細かく発泡する.	12.0×6.2×4.1
28	222	4	龍泉窯系青磁 椀	a) 堅緻. 微細な空隙を生じる. 灰白色. b) 釉は明灰緑色. 透明. 細かく発泡する.	15.8×

表3　遺物一覧表3

図	遺物番号	遺構	分類／特記	(a) 胎土 (b) 器表	計測値　口縁部径×底部径×器高 その他の計測値(cm)
28	224	4	東播系須恵器 捏鉢	a) 細粒砂を含む．堅緻． b) 灰白色．	
28	225	4	石鍋	滑石．＊鍔以下の外面に顕著な煤状の付着物．	32.2×
29	226	4	石鍋	滑石．	
29	227	4	石鍋	滑石．	
29	228	4	石鍋	滑石．＊後の加工が，図上左側面にある．	
27	229	4	土師器 糸切底皿	a) 褐色粗粒の粒子をわずかに含む． b) 器表の荒れが著しい．にぶい橙色．	8.8×7.5×1.8
36	230	7	青磁 碗	a) 堅緻．細かな空隙を生じる．灰黄色． b) 釉は，薄く透明，灰オリーブ色で碩子状光沢．	×6.3×
36	231	7	瓦質土器 湯釜	a) 精良． b) 灰白色．	
36	232	7	瓦質土器 湯釜	a) 精良．断面では薄層が観察される． b) 外面黄灰色，外面灰白色．	13.6× 胴部径21.7
36	233	7	土師質土器 火舎	a) 粗粒砂をわずかに含む．緻密な生地． b) にぶい黄橙色．	×22.4×
36	234	7	陶器 甕	a) 粗粒砂をわずかに含む．断面では，内面と外面での色調の明瞭な差を観察できる．外底面は，焼成不良で極く軟．　b) 灰白色．	13.6×
37	235	7	瓦 平瓦	a) 粗粒砂を顕著に含む．須恵質． b) 灰白色．	×2.6×
37	236	7	瓦 平瓦	a) 粗粒砂を顕著に含む．瓦質． b) 灰白色．荒れが著しい．	厚さ1.9
36	237	7	石鍋 鍋	滑石． 粗面を成す．	底部厚さ1.6
36	238	7	砥石 砥石	砂岩． 板状．片方の砥面に条溝	長さ(7.6)×幅(4.8)×厚さ1.2
39	239	9	瓦 軒丸瓦	a) 均質． b) 灰白色．	瓦当面径20.0
39	240	9	瓦 平瓦	a) 粗粒砂を顕著に含む．瓦質．軟． b) 器表の荒れが著しい．	厚さ2.2
39	241	9	白磁 碗	a) 白色．細粒の黒色粒子が顕著． b) 釉は透明，黄褐色．	18.1×
37	242	7	石錘	黒曜石製．	長さ2.5×幅(1.4)×厚さ0.4
41	243	12	弥生式土器 甕	a) 粗粒砂を顕著に含む．砂味が強い． b) 内面灰黄褐色．外面明褐色．荒れが著しい．	×7.9×
41	244	12	弥生式土器 甕	a) 粗粒砂を顕著に含む．砂味が強い． b) 内面にぶい褐色，外面橙色．	×8.9×
41	245	16	弥生式土器 甕	a) 粗粒砂を顕著に含む． b) 荒れが著しい．	26.8×
42	246	16	白磁 碗	a) 堅緻．細かな空隙を生じる．白色． b) 釉は発泡が著しく，半透明，淡黄色．	×6.9×
42	247	16	弥生式土器 甕	a) 粗粒砂を顕著に含む．砂味が強い． b) 橙色．荒れが著しい．	37.5×
11	248	2 3b層	瓦 軒丸瓦	a) 粗粒砂を含む．断面で層状の構造． b) 灰白色．	瓦当面径14.4
9	249	2 3a層	須恵器 坏蓋	a) 粗粒砂をわずかに含む堅緻． b) 灰色．	14.9×4.8×
11	250	2 3b層	須恵器 坏	a) 粗粒砂をわずかに含む．やや軟． b) 灰白色．	×　×14.1 受部径14.1
12	251	2 3c層	須恵器 坏蓋	a) 粗粒砂をわずかに含む． b) 灰色．	13.3×4.7×
12	252	2 3c層	須恵器 坏蓋	a) 粗粒砂をわずかに含む．堅緻．断面では暗紫灰色． b) 灰色．	12.7×3.8×
9	253	2 3a層	須恵器 坏蓋	a) 粗粒砂をわずかに含む．堅緻．断面は明紫灰色． b) 青灰色．	13.3×4.0×
13	254	2 3i層	須恵器 坏蓋	a) 粗粒砂，細粒砂を含む．やや軟． b) 灰色．	10.5×3.4×
13	255	2 3i層	須恵器 坏	a) 粗粒砂を顕著に含む．堅緻．断面では紫灰色． b) 灰色．	12.2×4.8×4.8 受部径15.0

表4　遺物一覧表4

図	遺物番号	遺構	分類／特記	(a) 胎土 (b) 器表	計測値　口縁部径× 底部径×器高 その他の計測値(cm)
36	256	7	須恵器 坏	a) 精良，堅緻． b) 明青灰色．	×11.3×3.9 受部径13.5
12	257	2 3c層	須恵器 坏	a) 粗粒砂を含む，堅緻． b) にぶい赤褐色．	×11.8× 受部径14.3
13	258	2 3i層	須恵器 坏	a) 黒色の細粒砂を顕著に含む． b) 灰色．	×12.6×3.7 受部径14.9
13	259	2 3i層	須恵器 坏	a) 粗粒砂をわずかに含む，堅緻． b) 灰色．	×9.2×2.2 受部径11.1
13	260	2 3i層	須恵器 坏	a) 粗粒砂を含む，堅緻．破面で樹脂状の光沢． b) 灰色．	0.3×5.0 受部径13.5
9	261	2 3a層	須恵器 坏蓋	a) 粗粒砂を含む，断面で層状の構造が顕著． b) 灰色	11.7×3.6
14	262	2 3e層	須恵器 坏	a) 精良，堅緻，部分的に空隙を生じる． b) 灰色，内面がより暗い．	13.9×10.8×2.0
13	263	2 3i層	須恵器 高台坏	a) 精良，やや軟，レンズ状の空隙を生じる． b) 灰色．	19.0×9.3×3.7
13	264	2 3i層	須恵器 坏蓋	a) 細かな空隙を生じる． b) 灰色．	14.6×3.1×
13	265	2 3i層	須恵器 高台坏	a) 粗粒砂，細粒砂を含む，細かな空隙を生じる． b) 灰色．	14.0×9.8×4.1
9	266	2 3a層	須恵器 高台坏	a) 精良，堅緻，破面では樹脂状の光沢． b) 灰色	15.5×10.6×4.2
10	267	2 3a層	陶質土器 甕	a) 粗粒砂を含む，堅緻． b) 灰色，＊所謂「朝鮮製無釉陶器」	頸部(最小22.6)
14	268	2 3i層	瓦 平瓦	a) 均質，軟．断面は白色． b) 黒色．	厚さ2.8
11	269	2 3b層	瓦 平瓦	a) 粗粒砂を顕著に含む，軟． b) 灰白色．	厚さ1.5
13	270	2 3e層	弥生式土器 甕	a) 粗粒砂を含む，断面では黒色． b) 橙色．	×8.4×
12	271	2 3c層	弥生式土器 甕	a) 粗粒砂を含む，砂味が強い． b) にぶい橙色．	×9.1×
13	272	2 3e層	弥生式土器 甕	a) 粗粒砂を含む，細孔が顕著，断面では黒色． b) 橙色．	19.8×
13	273	2 3e層	弥生式土器 壺	a) 粗粒砂を多量に含む，断面では灰色． b) 淡黄色．	×4.2×
12	274	2 3c層	弥生式土器 甕	a) 粗粒砂を含む，砂味が強い． b) にぶい黄橙色．	21.3×
12	275	2 3c層	弥生式土器 壺	a) 粗粒砂を顕著に含む，断面では橙色． b) 灰色．	頸部径9.4
13	276	2 3i層	土師式土器 甕	a) 粗粒砂を含む，粗粒の橙色粒子を含む． b) 内面にぶい橙色，外面にぶい黄橙色．	18.1××
14	277	2 3i層	土師式土器 甕	a) 粗粒砂，細粒砂を含む． b) 浅黄橙色．	24.9××
9	278	2 3a層	陶質土器 甕	a) 細粒砂を含む． b) 灰色．＊所謂「朝鮮製無釉陶器」	厚さ0.8
9	279	2 3a層	陶質土器 甕	a) 細粒砂を含む，断面では褐灰色． b) 灰色．＊所謂「朝鮮製無釉陶器」	厚さ0.8
9	280	2 3a層	陶質土器 甕	a) 粗粒砂，細粒砂を含む． b) 灰色．＊所謂「朝鮮製無釉陶器」	厚さ0.8
11	281	2 3b層	陶質土器 甕	a) 粗粒砂，細粒砂を含む，細孔を生じる． b) 灰色．＊所謂「朝鮮製無釉陶器」	厚さ0.8
9	282	2 3a層	陶質土器 甕	a) 細粒砂を含む，粗粒の黒色粒子を含む． b) 灰色．＊所謂「朝鮮製無釉陶器」	厚さ0.8
9	283	2 3a層	陶質土器 甕	a) 細粒砂を含む． b) 灰色．＊所謂「朝鮮製無釉陶器」	厚さ0.6
11	284	2 3b層	陶質土器 甕	a) 細粒砂を含む． b) 灰色．＊所謂「朝鮮製無釉陶器」	厚さ0.8
9	285	2 3a層	陶質土器 甕	a) 細粒砂を含む． b) 灰色．＊所謂「朝鮮製無釉陶器」	厚さ0.8
9	286	2 3a層	陶質土器 甕	a) 細粒砂を含む，断面中央部は暗い灰色． b) 灰色．＊所謂「朝鮮製無釉陶器」	厚さ0.7
11	287	2 3b層	土師式土器 坏	a) 粗粒砂を含む，粗粒の橙色粒子を含む． b) 浅黄橙色．	×6.1×

表5　遺物一覧表5

図	遺物番号	遺構	分類／特記	(a) 胎土 (b) 器表	計測値　口縁部径× 底部径×器高 その他の計測値(cm)
9	288	2 3a層	黒色土器A 高台碗	a) 粗粒砂をわずかに含む．生地は極く緻密．軟． b) 灰白色．	6.4×
9	289	2 3a層	須恵器 高台坏	a) 細粒砂を混む．堅緻． b) 外面は細かなあばた状を呈す．内面黒色，外面灰色．	×8.8×
14	290	2 3f層	須恵器 甕	a) 精良．堅緻．断面は器表に比べ明るい灰色． b) 外面の一部に自然釉．灰色．＊底面に坏蓋が融着．	×10.9× 肩部径15.7
13	291	2 3i層	須恵器 坏蓋	a) 細粒砂を含む．細孔を生じる． b) 内面浅黄橙色，外面にぶい橙色．	15.1×
14	292	2 3i層	須恵器 坏	a) 均質．やや軟． b) 灰色．	14.2×11.2×3.5
13	293	2 3e層	須恵器 坏蓋	a) 均質． b) 灰白色．	15.4×
14	294	2 3i層	須恵器 鉢	a) 粗粒砂を含む．細孔を生じる． b) 灰色．	×8.5×
9	295	2	須恵器 高坏	a) 均質．堅緻．断面では灰赤色を呈す． b) 外面の片側が黒色のほかはすべて灰色．	
12	296	2 3c層	須恵器 高坏	a) 粗粒砂をわずかに含む．堅緻． b) 内面灰色，外面灰白色．外面の一部に自然釉．	受部径13.3
14	297	2 3d層	須恵器 高坏	a) 精良．堅緻． b) 灰色．	9.8×
9	298	2 3a層	須恵器 壺	a) 均質． b) 灰色．	頸部径11.4
14	299	2 3i層	須恵器 広口壺	a) 均質．堅緻．断面では器表より明るい灰色． b) 灰色．	9.5×
9	300	2 3a層	須恵器 鉢	a) 細粒砂を含む．細孔を生じる．堅緻． b) 内面灰色，外面灰黒色．	15.6×
28	301	4	須恵器 壺	a) 粗粒砂を含む．堅緻． b) 外面は内面より暗い灰色．	×12.0×
14	302	2 3i層	須恵器 広口壺	a) 粗粒砂を含む．空隙あり．堅緻． b) 灰色．	16.3×
12	303	2 3c層	須恵器 広口壺	a) 均質．軟． b) 灰白色．	17.6×
14	304	2 3i層	須恵器 甕	a) 均質．堅緻．断面中央部では淡橙色を呈す． b) 灰褐色．	45.8×
14	305	2 3e層	須恵器 甕	a) 粗粒砂をわずかに含む．堅緻． b) 灰白色．	×17.0×
11	306	2 3b層	土師器 高台坏	a) 粗粒砂を含む．軟． b) 灰白色．	×9.2×
9	307	2 3a層	黒色土器A 高台坏	a) 粗粒砂をわずかに含む．軟． b) 灰白色．荒れが著しい．	×6.7×
9	308	2 3a層	黒色土器A 高台碗	a) 均質．軟． b) 内面黒色，外面灰白色．	14.6×6.7×6.2
11	309	2 3b層	土師器 高台碗	a) 粗粒砂を含むほかに，粗粒の橙色粒子を含む．角閃石が含まれる． b) 明褐灰色．荒れが著しい．	×7.6×
9	310	2 3a層	黒色土器A 高台碗	a) 粗粒砂を含む．生地は緻密． b) 内面黒色，外面褐灰色．	×7.1×
9	311	2 3a層	瓦器 高台碗	a) 均質．緻密．断面は灰白色． b) 灰色．	×6.4×
9	312	2 3a層	黒色土器A 高台碗	a) 均質．緻密． b) 内面黒色，外面灰白色．	14.6×
13	313	2 3e層	須恵器 坏蓋	a) 粗粒砂を含む．細孔を生じる． b) 灰色．	10.3×
27	314	4	土師器 糸切底坏	a) 砂味が強い．砂粒は極少ない． b) 橙色．荒れが著しい．	12.6×9.0×2.7
27	315	4	土師器 糸切底坏	a) 砂味が強い． b) 浅黄橙色．	13.5×9.2×2.2
27	316	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂をわずかに含む． b) 内外面とも浅黄橙色．	14.2×7.7×2.8
27	317	4	土師器 糸切底坏	a) 粗粒砂を顕著に含む． b) 内面淡黄色，外面橙色．荒れが著しい．	12.6×8.4×2.7

おわりに

今回調査地点の出土遺物の多くは，流路あるいは溝の洗い出し，流れ込みによると考えられる資料である。そのため，遺構を直接考える資料には不十分であるが，遺跡の姿を髣髴ながら摑むことはできよう。

立花寺遺跡の年代の上限は，Ⅰ区，Ⅱ区両調査区から出土した石器によって少なくとも，縄文時代までは考えることができる。

弥生時代については，流路（遺構2）の洗い出しによる資料がまとまっているほかに，Ⅱ区では土壙12を調査した。中期後半の土器が殆どである。前期，後期については確認できなかった。土壙12は，墓壙とも袋状竪穴ともできない遺構で，周辺遺跡での両者の立地とは全く異なるものでもある。

古墳時代の後期に属する資料は，さきと同様Ⅰ区流路出土資料を中心に調査区のどの遺構からも出土し，今回調査で最も多量に出土した資料である。ただし，この時期に関係すると推定できる遺構は検出できなかった。図示できる資料は無かったが，土師器も相応の量出土して遺物の構成に特殊なあり方は予想できない。調査地点周辺部の地表にもかなりの密度で散布しており，一帯に集落の立地が考えられよう。ただ，そのかなりの部分を，Ⅰ区設定の際しての確認調査でみたように，谷川により削除されている可能性がある。

奈良時代から平安時代にかけての資料も両調査区にまたがって出土した。なかでも，細片でかつ少量ではあるが，瓦の出土は注目される。それを使用した施設が営まれたものとするならば，概要に述べたような地形上の制約から，その可能性のある範囲はごく限られたものとなる。

鎌倉時代以降については，Ⅱ区において溝4の調査のほか，各溝から遺物の出土をみている。溝4では，他での例と同様，破損していない土師器坏皿が投棄された，と思えるような状態で出土した。

以上，遺物の内容は示唆に富むものであるが，遺跡を明らかにするためには全く不足である。続くであろう発掘調査に期待するところ大である。

P.10 註1） 赤司善彦 1991「朝鮮製無釉陶器の流入—高麗期を中心として—」九州歴史資料館 研究論集 16 pp.51-67

立花寺1
福岡市埋蔵文化財調査報告書第272集
1992年3月13日
発行：福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷：株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎埠頭6丁目6番41号